
河城にとりの科学的？ 生活

さかまた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

河城にとりの科学的？ 生活

【Nコード】

N5753T

【作者名】

さかまた

【あらすじ】

幻想郷に高くそびえる妖怪の山に住む河城にとり。

彼女は今日も気ままに幻想に生きている。

そんないつもまったりマイペースな彼女が親友を振り回したり、それ以上に奔放な親友に振り回されたりするお話。

プロローグ

川辺に小さな家がある。家主の名前は河城にとり。機械いじりと人間が大好きな風変わりな妖怪だ。

今日も彼女は何処からか拾ってきたガラクタをいじっている。

ふいに家の戸をコンコン、と叩く音がした。どうやら来客のようだ。

「まったく、今いいところなのに。はいはい、今開けますよ」

彼女はそう言っ立ち上がると戸の前まで行き、戸を開けた。

「おっ、盟友。久しぶりだね。また面白い物を持ってきてくれたのかい？」

彼女が盟友と呼んだ人間は、そう聞かれると背中に背負っていた箱をとりの前に置く。

「ふーむ、変わった箱だねえ。てっぺんから細い針金みたいなのが出てるね。あと、側面にはクランクが付いてる」

にとりは箱の外見をじろじろと見たり、側面のクランクを回したりしている。

「うーん、何も起こらないなあ。それにしても、このクランクやけに重いね……え？ もっと速く回してみろって？ うん。わかった」
そう言われてにとりはクランクを目一杯の力で回す。

回し始めてしばらくすると、箱の上部にある針金が光り出した。

「おおっ！ 光った光った！」

にとりが驚きの声を上げる。しかしにとりがクランクを回す手を止めると、すぐに針金は輝きを失ってしまった。

「ありゃ、もう終わり？」

「ふう……うーん、確かに面白い機械だけど、ずっとクランクを回してないといけないのは疲れるね」

盟友がそれに頷く。

「これをどうにか改良すれば、こんなちっぽけな針金だけじゃなくてあの吸血鬼の館にあるらしいグリルとかいうやつも使えるようになりそうだね。電気力で炎を作って操る……想像しただけでも楽しくなってきたよ」

にとりが声を弾ませて言う。

「そういえば聞いてなかったけど、この機械はなんて名前なんだい？ 盟友」

にとりが聞くと、盟友は”えれきてる”と答えた。

「エレキテル？ 変わった名前だね」

それを聞いた盟友は少し苦笑し、それから二人は世間話をしたり、機械をいじって過ごした。

「でさ、そのせいで前は花に負けちゃったんだけど……ありゃ、もうこんな時間？ 盟友、そろそろ帰らないと危ないよ」

二人が会った時には頂上に昇っていた太陽が、もう地平線の向こうに沈みかけている。

「しっかし、こんな面白い物を作るなんてやっぱり人間はすごいね……私も頑張らなくなっちゃ！ あ、このエレキテルもらってもいいかな？ いろいろバラして中身見たいからさ」

盟友は首を縦に振った。

「本当？ ありがとう盟友！ じゃあ次は私が何か盟友に作って見せてあげるね！」

にとりは今日一番の笑顔を見せる。

「それじゃ盟友、また今度ね！」

そう言って二人はハイタッチを交わして別れた。

射命丸文のカメラ

人里の外れに一軒の家がある。その家主は、普通の人間なのだが一人で妖怪の山に何のためらいもなく入って行くなど、どこか風変わりな点があるので道士かなにかの修行でもしているのではないかと人々から不思議がられていた。

太陽はもう昇っているが頂上まで昇るにはまだまだ時間がかかるようだ。

家主は朝食を摂りながら、今朝拾ってきた天狗が空からばらまいたのであると新聞を読んでいる。

新聞によると幻想郷は昨日も平和でとくにたいした事件はなかったようだ。だが今回は毎週恒例”今週の弾幕”コーナーがなかった。カメラ故障の為お休み、とのことだ。カメラが故障したのなら天狗はあの子のところに持っていっただろうから、後で行ってみるかな、と彼は思った。

川辺のにとりの家に着くと、案の定彼女はいつもより慌ただしく動いていた。

「おや、盟友。……さては今朝の新聞読んで、カメラが私のところに修理に出されてると思ったでしょ？」

にとりはどうだ、と言わんばかりに得意げな顔をする。

盟友は照れ臭そうに頭をかきながら

「……当たり前」

と呟いた。

「やっぱり！　しかしあの新聞からカメラが私のところにあると考
えるなんて、盟友は目の付け所が違うねえ。で、見てみたい？　カ
メラ」

「当然。何の為に朝からここに来たと思ってるんだい？」

盟友は即答する。

「うむ、盟友がそこまで言うなら仕方ない……これだあ！」
そう言っただけにとりは大袈裟にカメラを空に掲げた。

「へえ、人里の写真屋が持つてるやつみたいに大きくないね。……
中身見ていい？」

「どうぞどうぞ。あなた様のお好きなように」

にとりはへらへら笑いながら冗談っぽく腰を低くして答え、カメ
ラを渡す。

「よし、では早速……よつと」

盟友はカメラの裏側の蓋を開ける。すると糸巻に巻かれた薄い茶
色の半透明の膜が現れた。

「なるほど、薄い感光板を糸巻に巻き付けてるのか。写真を撮った
らこれを回せば毎回撮るたびにカメラを開けなくて済むから、これ
なら弾幕の中でも何枚も写真を撮れるのも納得できるね」

盟友は分析しながら感心している。

「フィルムって言うらしいよ。文さんが言ってた。あと本気出せば
フィルムをおもいきり速く巻けるらしいんだけど、それやると巻
くの集中しちゃって機敏に動けなくなるからたまに弾に当たっ
ちゃうんだって」

「へえ、フィルム、か。しかしあの素早い天狗が弾に当たるなんて、
よっぽど本気で巻いてるときは集中してるんだ」

にとりの説明に相槌をうちながら盟友はフィルムを外してさらに

奥をのぞく。フィルムの先には鏡が入っている。可動式のように、指で押すと上に跳ね上がった。どうやらこの鏡でどのように写るか確認し、撮る直前に鏡が上がって撮影する仕組みのようだ。鏡が上がったさらに先には大きなレンズがあり、こちらを見つめている。

「フィルム、鏡、レンズ。あとは……」

カメラの右上のボタンを押す。が、ボタンは固くなっていて、作動しなかった。

「……シャッターが作動しなかったから、悪いのはシャッターみただいね」

盟友はカメラをにとりに返しながら言う。

「うん。まあ盟友が来る前に一回私も中を見て一応目星は付けてたんだ。あと悪いところはフィルムを付ける軸が歪んでたくらいかな。で、どうだった？ 楽しかった？」

「もちろん。カメラなんて商売道具、写真屋は絶対触らしてくれないから、カメラは本でしかしくみは知らなかったから、貴重な体験だったよ」

「それはよかった。ん？ その風呂敷に包んであるのは何？」

にとりが盟友が片手に持っている風呂敷を指して言う。

「今気づいたんだね……はい、差し入れ。」

盟友は風呂敷の包みを解き、包まれていたきゅうりを数本にとりに渡した。

「おおっ！ きゅうり！ 気が利くね、盟友。これで昼の後の修理も頑張れるよ。ありがとう！」

「どういたしまして。さて、差し入れも渡したし、帰ろうかな」

「あ、待って」

にとりが引き止める。

「お昼……食べてきなよ。せっかくここまで来たんだしさ」

「いいのかい？ じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうかな。」

「よーし、今日のお昼は二日漬けたきゅうりの漬物になすときゅうりの炒め物、後きゅうりチャーハンで決まり！」

「これでもかってほどきゅりづくしだね……」

盟友は少し苦笑する。

「えー、いいでしょ？ 今日盟友がきゅり持ってきてくれたんだし、悪くなる前に食べなきゃね！」

にとりが盟友に笑いかける。彼もそれに笑顔で返す。

「そうだね。じゃ、お昼の準備をしようか。僕も手伝うからさ」

「え？今日は盟友はお客なんだから、手伝わなくていいよ……」

「いいからいいから。さ、始めよう」

太陽はいつの間にか頂点まで昇っていて、太陽の光を川の水が反射して輝いていた。

河城にとりの光学迷彩

新しい朝が来た。外では鶏が甲高い声で鳴いている。

彼は家から出て、天狗の新聞を拾いに行く。毎度のことながら、人里にまで新聞を配りに（ばらまきに）来る天狗はなかなか律儀な妖怪だと、ふと彼は思った。

「それに比べて河童は……」

そう言いながら彼は屈んで足元に落ちている新聞を拾おうとする。だが、

「？」

彼が新聞を拾おうとすると、新聞は彼を拒絶するかのようになら離れていつてしまった。

「河童が何だつて？」

聞き慣れた声にあわてて顔を上げると、目の前には青のワンピースに緑の帽子、左右で束ねた青い髪が特徴の彼の親友、河城にとりが立っていた。

「うわあっ！」

突然の出来事に彼は尻餅をついてしまった。

「あはははっ！　びっくりした？」

にとりは悪戯っぽく笑う。

「……うん、ホントにびっくりしたよ」

「やったあ！　実験大成功！　あと盟友、おはよう！」

にとりは笑顔で盟友に挨拶する。

「ああ、おはようにとり」

盟友も笑顔で挨拶を返し、それから二人はぱしん、と手を合わせる。

「っと、まだ朝早いから外で騒いでたら迷惑だし、一旦家に入ろうか」

「それもそうだね。わかったよ」
そう言って二人は盟友の家に入っていく。

「そついえば盟友」

「ん、何？」

「さつき『それに比べて河童は……』って言ってたけど、なにと比べて？」

盟友は少し硬直する。

「あ、ああ。あれね。毎朝人里にまで新聞を配りに来る天狗は律儀だなあ、って」

「ふーん。で、天狗に比べて河童は何？」

にとりはいつもより少し鋭い目で盟友を見る。

「気まぐれで悪戯っぽくて、子供っぽいなって思った。あと……」
「あと何？」

にとりは膨れっ面をして言った。

「……やることが面白い、かな」

それを聞いたにとりの顔が少し戻る。

「むう……最初はばかにされたような気がしたけど、やることが面白いってのはあんまり悪い気はしないね。でも子供っぽいってのは聞き捨てならないなあ、盟友？」

「……ごめん。あ、そうだ。今から僕は朝ごはん食べるから、にとりも朝から何も食べてないなら一緒にどう？」

「お、気が利くね盟友。じゃあ一緒にさせてもらおうかな。あ、朝食に免じてさつきのことは許してやろう！」

「気が変わるの早いなあ」

盟友は苦笑して、朝食の仕度を始めた。

「ごちそうさま、他人の家で食べる朝食もなかなかいいもんだね」
「まあ、普通は家に泊めてもらわない限りそうそう朝食は他人の家じゃ食べないよね。……そういえばにとり」
「ん？」

「さっき実験大成功とか言ってたけど……新しい発明でも作った？」
盟友がきく。

「うーん、別に新しい発明じゃないよ。少し改良した感じかな。そ
ういや盟友にはお披露目してなかったね」

にとりはリュックの中をぐそぐそと探り始める。

「……まさか」

「そう！ そのまさか！ 私、河城にとりの最高傑作の一つ、その
名も光学迷彩〜！」

にとりは高らかにそう言つと、リュックの中から半透明な雨合羽
のようなものを取り出した。

「おっ、話には聞いたことあるけど見るのは初めてだよ」

盟友は思わず拍手する。

「ふふふ、まあまあ抑えて抑えて」

にとりは少し照れ臭そうにしている。

「でもそれ博麗の巫女とか普通の魔法使いに簡単に見破られてたよ
ね」

にとりの顔が少し曇る。

「ぐ……仕方ないじゃんか！ 光学迷彩つてのはさ、繊細なものな
んだから弾幕ごっこなんて過激な遊びには向かないの！」

「……じゃあ聞くけど、どんな使い方が正しいのさ」

「それは……盟友が拾おうとした新聞をパツと奪う、とか……」

にとりは目を逸らしながら言つ。

「あれやつぱり君の仕業だったんだ……ってか悪戯くらいにしか使
えないじゃない？」

それを聞いたにとりが憤慨する。

「失礼な！ 他にも使い道はあるってば！ ……今思いついてないだけで」

「……まあいいや。じゃあ原理を教えてください？」

盟友は少しあきれた顔をしながら言う。

「もちろん。まず盟友はどうやって物が目に映るかわかる？」

「えーっと……どうだっけ？」

「光が物体に反射して、その反射した光が目に入るから、見えるんだよ」

「……そうだった気もする」

盟友は少しずつ思い出そうとする。

「だから、その反射した光が相手の目に入らなかつたら、相手にはその物体は見えなくなる、この原理を光学迷彩は利用してるんだ」
「なるほど」

「本当は光を完全にすり抜けさせることができれば最高なんだけど、ほぼ不可能に近いからさ、光を少しずつずらしてずらしてずらして……ってのを繰り返してそれに近い状態を作り出すんだ」

説明するのが楽しくなってきたのか、にとりの口調が速くなる。

「へえ……でも、どうやって？」

「私の能力……知ってる？」

「水を操る程度の能力でしょ？」

「当たり前。その能力を使って小さな水のレンズをたくさん光学迷彩スーツの表面に発生させるんだ。それがさっき言ったように光を少しずつずらしていく、するとあら不思議！ 光はほとんどが反射せずに通り返けて行って、周りにはほとんど姿が見えなくなるって算段さー！」

「なるほど。大体はわかったよ。弱点は何かあるの？」

「弱点？ えっと、レンズは水だから、雨の日は雨と一緒に流れちゃうんだ」

「なるほど、雨の日は使えない、と」

盟友はいつの間にか説明を紙に書き留めていた。

「で、悪戯以外に何か使い道はないの？」
にとりはしばらく考える。

「うーん、思い付かないなあ」

「あんまり過激なことはできそうにないしなあ、こっそりどこかに
忍び込む…とか？」

「忍び込む……………そうだ！」

「ん？何かひらめいた？」

「紅魔館に行こう！」

「へ？」

にとりは突拍子もないことを言い出した。外では鶏は鳴き止み、
かわりにすずめが平和そうに鳴いていた。

紅魔館

「紅魔館に行こう！」

始まりはにとりの突拍子もない一言からだった。

「ごめんにとり、もう一度言ってくれるかい？」

「だから、紅魔館に行こうって言ったんだよ。盟友。うーん、忍び込むって言う方が正しいかな」

盟友の顔が青ざめる。

「どうして君はそんな危ないことを考えつくんだい？ 普通に近づくだけでも危険だって言われてるのに！」

紅魔館に近づくと門番に捕まって、館の主の吸血鬼に食べられてしまうと人里ではもっぱらの噂だった。

「大丈夫、大丈夫。光学迷彩があるんだしさ」

そう言っでにとりは光学迷彩を持ってかざして見せる。

「本当に大丈夫なの？」

盟友がまだ不安そうに言う。

「心配性だなあ盟友は。光学迷彩がしっかり効くのは盟友も確認済でしょ？ さ、いこつ！ まだ朝だし、吸血鬼だつて寝てるって」

「あつ、ちよつと！」

にとりは光学迷彩をリユックにしまうと、盟友の手を取って外に出た。外はまだ静かで、鳥のさえずりだけが聞こえていた。

森を抜け、二人は紅魔館の近くにある霧の湖までやって来た。今日はあまり霧は深くなく、湖に突き出した土地に建つ紅魔館がよく見える。

「さてと、そろそろ潜入の準備をしようか。はい盟友、一応もう着

といてね」

にとりはリュックを降ろし、中から光学迷彩を取り出して、盟友に渡した。

「あれ、僕に渡しちゃっていいのかい？」

「いいのいいの。予備があるからさ」

彼女はそう言ってリュックからも一つ光学迷彩を取り出し、上から羽織って少し伸びをして彼に向き直る。

「んー、よし！ 準備完了！ 盟友、急ごうか。こんな格好してたら妖精たちが集まってきて潜入どころじゃなくなっちゃうからね」

確かに雨でもないのに合羽を着ている姿はいささか滑稽だと彼は思った。

「ほら、あそこが正門だよ」

草むらに隠れているにとりが盟友に耳打ちする。

「……まさか正門から堂々と入る訳ないよね？ いくら光学迷彩があっても……」

「大丈夫。当然一番安全な場所から入るよ」

「ならいいんだけど……」

「お、門番だ」

彼女の言う通り、門の近くに肩まで届く赤い髪に緑色のチャイナドレスを身に纏った、紅美鈴が立っていた。

「……噂だとよく居眠りしてるって聞いたんだけど、今日はばっちり起きてるね。ま、起きていようが無かるうが正面から入る気はさらさら無いんだけどね。盟友、他をあたろう」

盟友は黙って頷くと二人は音をたてないよう気をつけながら正門から離れた。

それから二人は紅魔館の側面に回った。側面は正門付近とは異なり、手入れが行き届いていないのか水際近くまで雑草や木が生い茂

っているし、庭を囲む柵は所々穴が空いている。警備も木陰で妖精メイドがサボって昼寝している程度だった。

「正面ほど警備は厳しくないみたいだね」

周りを見て盟友が呟く。

「まあ、侵入者は空から入ってくるしね」

「侵入者？」

「ああ、魔理沙のこと」

「ふーん……あ、にとりにとり！」

盟友が目醒まして伸びをしている妖精メイドを指さす。

「オーケー、光学迷彩展開！」

にとりはそう言って光学迷彩の表面に水のレンズを発生させる。

するとレンズは光を全反射に近い角度で屈折させ、たちまち二人の姿は見えなくさせた。まだ眠そうな目で持ち場に戻るらしい妖精メイドは二人に気づくこともなく素通りしていく。

「よし！ うまく機能してるみたいだね。上出来上出来。それじゃ

あ、あの窓から中に入ろうか」

「……どの窓のこと？ 指さしてるんだろうけどわからないよ」

光学迷彩を展開しているので、盟友には指さしているのがどの窓かわからなかった。

「あ、そうだったね。ごめんごめん」

その声が聞こえたのとほぼ同時に、盟友の目の前にあった窓ガラスが音をたてて割れる。盟友は気づかれたかと後ろを振り返るが、幸い妖精メイドはもう見えなくなっていた。

「これだよ、この窓。さあ、潜入するよ！」

「……もっと用心しようか」

盟友はにとりの無用心さに半ばあきれていた。

二人は延々と長い廊下を歩いている。廊下は薄暗く、等間隔に吊

るされたランプだけが周りを照らしている。床には赤い絨毯が敷かれ、壁紙もまた赤い。

光学迷彩は切つてある。さすがのにとりも常に展開していると疲れようだ。

「しつかし長い廊下だね……悪趣味なくらい赤いし、飾り気もないし……お、でつかい扉。魔理沙が話してた図書館かな？」

それまでぶつくさと文句を言っていたにとりの顔が明るくなる。

「じゃあ盟友、久しぶりに光学迷彩を展開するよ」

盟友は軽く頷く。にとりはそれを確認すると光学迷彩を展開させる。

「さーて、どんな本があるのかなあ！ わくわく」

彼女は期待に胸を弾ませながら重い扉を開いた。木でできた扉が軋む音が広い図書館に響き渡る。

「誰？ ……レミイ？」

奥から声がした。

「やばっ！ 盟友、静かにね」

「……にとりこそ」

ナイトキャップのような帽子を被り、薄紫のローブを着たパチュリー・ノーレッジは羊皮紙の上を走らせていたペンを止めると、首を傾げた。

「……おかしいわね。気のせいだったかしら。……小悪魔、見てきて頂戴」

「はい、パチュリー様」

赤い髪に頭と背中に生えた羽、白い上着に黒いベストとロングスカートが特徴のパチュリーの使い魔である小悪魔は抱えていた本を机に置くと、入口の方へと向かった。

「んー。おかしいですねえ……誰もいないです……」

小悪魔は扉の周りを見回すが、何処にも人影は見えない。

「盟友、まだ静かにね」

「わかってるよ」

侵入者の二人はぼそぼそと喋りながら入口近くの本棚の彼女が戻るのを待っている。

「確かに物音はしたのになあ……んー」

小悪魔は頭を抱えながら戻っていった。

「ふう……どうやらまいたみたいだね、盟友」

にとりは光学迷彩を解除し、額の汗を拭うそぶりを見せる。

「別に見つかつたわけじゃないんだけどね……」

「まあね。それじゃあ盟友、せっかくこんな広い図書館に来たんだし、めぼしい本でも探そうか」

「ん、そうだね」

二人は本棚で入り組んだ図書館の奥で床にいくつか本を広げて、読みはじめた。

「うー、どれもわけわかんない魔法陣についての本ばかりだよ……つまらないなー。もつと機械についての本とか滑稽本とかあると思っただのに……盟友、何か面白い本はあった？」

「そうだね……この今読んでいる話は面白いよ」

彼は手に持っているにとりの横に詰まれている本とは違った、和綴じの本を渡す。

「どんな話？」

にとりは渡された本をのページをばらばらとめくりながら聞く。「とある猫の話だよ。その猫から見た人間が描かれているんだ。そこに出てくる人間がおかしくてね……それにけちをつけたりする猫もまた面白いんだ。それで、ああ、人間の行動は傍から見たらなかなかおかしいことをやってるんだな、とか考えさせられるんだ」

「面白そうだね、その本。……いいなあ、盟友は気に入った本が見つかってさ。私は面白そうな本が見つからなかったのに……」

にとりは肩を落とす。

「まあまあ、そう気落ちしないで……」

「むー」

にとりが膨れっ面をしていると、部屋中にふいに鐘の音が鳴り響いた。

「あ、パチュリーさまパチュリーさま、お昼の鐘ですよ。お昼食べに行きましょう」

「……私はこれ書き上げてから行くから小悪魔は先に行って……」
パチュリーはだるそうに答える。

「そんなこと言わずに、行きましょ」

「……いや、私は一回くらい食事しなくても死なないし……」

小悪魔の表情が厳しいものに変わる。

「だめですよ！ そんなこと言ってほっといたらこの前一日中飲まず食わずで魔導書のまとめ作業やって倒れたじゃないですか！ 今日は何がなんでも来てもらいますからね！」

小悪魔はそう言つてパチュリーを机から引きはがし、図書館の出口へと連れていった。

「……むきゅー」

「……さっきのは昼の鐘かな？」

「多分そうだね……！ しっ！ 誰か来る」

にとりは急に動きを止めた。

「……だいたいパチュリーさまはずっと図書館に籠ってたら黴臭くなるとか考えないんですか？ それにあの時はお嬢様だつて心配して……」

「わかった、わかったから……」

パチユリーは煩わしそうに小悪魔に手を引かれて図書館を後にした。

「行っただけだね」

「うん、行った」

本棚の陰から二人はその一部始終を見ていた。

「……苦労してるんだね、あの人」

盟友が気の毒そうに言う。

「うんうん、ああいうお節焼きな奴がいると困るよねえ」

「え、そっち!？」

「え、パチユリーのことじゃないの!？」

二人は互いに驚いた顔をし

「……やっぱり人間って変わってるなあ」

「……やっぱり河童って変わってるなあ」

同時に言った。

「む……まあそれは置いて、これからどうするの?」

「……パチユリーの机を物色したら、帰ろうか」

「……いいの? 勝手に漁っちゃって」

「ばれなきゃ大丈夫だって。……それに紅魔館に不法侵入してるし

……さて、どんな珍しい物があるかなあ!」

にとりは再び目を輝かせながら図書館の奥へと進んでいった。

「ふーん、意外とごちゃごちゃしてるんだね」

にとりは本が左右に積み上げられた机を見て言う。

「羽ペンにインク……珍しいもので字を書くんだね」

盟友は羽ペンを手に取って関心している。

「お、盟友盟友、顕微鏡だよ! これは撮っておかなくっちゃね」

にとりはリュックから小さなカメラを取り出し、顕微鏡を写真に収めた。

「そのカメラはどうしたの?」

「この前カメラを修理した後、つくりを簡単にして作ってみたんだ。フィルムの交換ができないから使い捨てだけど、レンズを小さくしてしっかりピントを合わせなくてもきれいに撮れるようにできたよ。名前をつけるとしたら……『撮れるんです』とかかなー」

にとりは顕微鏡を撮りながら得意げに話す。

「問題は四枚しか撮れないことだね……あ、一枚余っちゃったけど、まあいつか。さて、やることはやったし、帰ろうか」
「そうだね」

「さて、入口のホールまで来たわけだけど……もういつそのこと光学迷彩の力を試すためにも正門から堂々と出ようか！」

盟友が驚愕のあまり固まる。

「男は度胸！ さあ、行くよ！」

にとりは彼の手を引いて外に出る。

外に出ると太陽はてっぺんまで昇っていた。

「はっ、ここは？」

盟友は我に帰る。

「正門だよ盟友。ちょうど門も開いてて、門番もお昼寝中だ。出るなら今のうちってね！ それじゃ、お先にー」

「ち、ちよつと！」

にとりは光学迷彩を展開して正門を抜けようとする。

だが突然座り込んで寝ていた美鈴が立ち上がり、

「この気……曲者ッ！」

「え？」

見えないはずのにとりを蹴り飛ばした。にとりはそのまま宙を舞い、紅魔館の時計台を越える見えなくなった。しばらくして、何

かが水に落ちる音が聞こえた。

「にと……あ」

盟友は自分の光学迷彩の効果が切れているのに気がつく。にとりが気絶したためだろうか。盟友はさつと塀の陰に伏せて隠れる。

「……ハッ！ いけない私ったら、また寝ぼけて……もう昼だし休憩しに行こうかな。妹様も暇してるだろうし」

美鈴は太陽を見て時間をぴたりと言い当てると、紅魔館の方へ歩いていった。

盟友は美鈴が見えなくなると、一目散に門から逃げ出した。

盟友が湖を見ると、にとりが水際に打ち上げられていた。彼は近づいて声をかける。

「にとり、にとり」

「う、ん、盟友？」

「大丈夫？ 思い切り蹴飛ばされてたけど」

「だ、大丈夫。うん。落ちたのが湖でよかったよ。リュックの中身が潰れたら多分私泣いちゃってたよ。……ってもう日が暮れそうだね」

にとりが空を見上げると、空は夕焼けで真っ赤に染まっていた。

「じゃあ、最後に一枚紅魔館をバックに撮って、今日はお開きにしようか」

にとりが提案すると盟友は頷いた。

「あ、ちよつとそこの君いいかい？ 写真撮ってくれないかな？」

盟友は湖を飛んでいる妖精に声を掛ける。

「ほう、あたいに声をかけるとは、知らない人間もお目が高いね。いいよ！」

声を掛けられた妖精、チルノは偉そうに言う。

「ありがとう」

「えーと、このボタンを押せばいいの？」

「そうそう、よく知ってるね」

にとりが褒める。

「ふふん、天才に知らないことなどない！」

チルノは得意げに胸をはる。

「うん、すごいすごい。……じゃあ紅魔館と僕たちが入るように撮ってね」

「任しといて！……はい、笑って！」

カシャツというシャッター音が響く。

「よし！ 完璧なのが撮れたよ！ 天才でさいきよーのあたいが言うんだから間違いないし！ それじゃ、あたいはいそがしいからじゃあね」

「ありがとう」

二人はチルノにお礼を言うと、湖を後にした。

「一時はどうなるかと思っただけど、なんとか帰れたね」

帰り道の途中、盟友が口を開く。

「そうだね…… 最後以外はハプニングなくやれたね」

「……でももう二度と行かないよ」

「あんまり収穫なかったしね」

「そういう問題じゃなくてさ……」

「他に何かあるの？ ……あ、そろそろ人里だよ。それじゃ盟友、またね！」

「うん、また今度ね」

二人は挨拶代わりのハイタッチをして別れた。

まだ日は暮れておらず、空は夕焼けで真っ赤に染まっている。あのカメラにもう一枚フィルムが残っていて、この夕焼け空を写真を撮れたらいいのに、と彼は思った。

河童と厄神様

彼が目を醒ますと、太陽はすでに中天まで昇っていた。

「……いけない、寝過ぎてしまった」

彼は身体を起こすと家から出て、新聞を取りに行く。が、昼近くになるともう新聞は何処にも落ちていなかった。

「さすがに落ちてないか」

彼は新聞捜しを諦め、家に戻ってかなり遅いが朝食を探ることにした。

「さて、今日は何をしようか」

「うーん、いたた。昨日のが今になって効いてきたなあ」

にとりは昨日美鈴に蹴り飛ばされたときの痛みが今になって効いてきたようで、朝起きてからずっと布団に寝転がっていた。

「今日はどうしようかな……朝ごはん食べてから考えよ」

彼女は布団に寝転がりながら枕元に置いておいた壺からきゅうりを取り出し、かじる。

「……しよっぱ。漬けすぎたかな。失敗失敗。次は気をつけよ。さ、もう一本……あだだ」

彼女は全身に軽い痛みを感じながら壺に腕を伸ばし、さらにきゅうりを手に取る。

「さて、今日は何をしようかな……」

彼女はきゅうりをかじりながら考える。体が痛いからあまり外に出たくない。だがこうして家でだらけているのをあのお節介焼きな雛に見られたら面倒だ。

「にとりー、いるかしらー」

外で彼女を呼ぶ声がした。噂をすればなんとやらだ。

「いないのー？ 入るわよー」

やめる、入ってくるな。そうにとりが言う前に雛はドアを開けてにとりと対面した。

「お、おはよう。雛」

布団に寝転がったままにとりが挨拶する。

「あら、おはようにとり。……まだ寝てるの？ だらしないわね」
緑の髪を小さなリボンで前で束ね、黒に近い濃い赤の上着に白いフリルが縁に付いた赤いスカート、そして頭のとっぺんに乗った大きなこれまた赤いリボンが特徴の鍵山雛が白い歯を輝かせながら笑顔で辛辣な一言を放った。

「うぐ……しょうがないじゃないか。昨日あの、その、足を滑らせて崖から転げ落ちちゃって全身が痛いんだよ……」

「紅魔館に忍び込んだら門番に蹴り飛ばされた」などと言えるはずがなく、にとりはとっさにごまかした。

「あつ、そう！ ……まあ！ それは大変ね」

言動が一貫していない、今日は厄が足りないんだな、にとりは直感した。

「どうでもいいのか、心配してくれるのかはつきり……」

「どれどれ……」

「あがつ！ 痛い痛い痛い！」

雛は加減せずに思い切りにとりの腰を押す。

「うーん、これは重症ね。医者じゃない私でもわかるわ」

「はあつ……はあつ」

痛みでにとりの息は切れ切れで、目には涙が浮かんでいた。

「このままじゃしんどいでしょうから、薬草を採ってくるわ。それまでじっとしてるのよー」

そう告げて雛は出ていった。部屋に静寂が戻る。

「椀……盟友でもいいや、誰か助けて……」

「……とはいったものの、どれが薬草かわからないわ……」

雛はそれらしき草を見つけてもそれが薬草かはわからず途方に暮れていた。

「誰か薬草に詳しい方はいないかしら……」

雛はふわりと飛び上がり、くるくると回って辺りを見回す。

「んー、……いたいた！ もしもーし、そこの兎さーん」

「え？ 私ですか？」

彼女が声を掛けたのは、兎耳のついた淡い紫色の長い髪に紺色のブレザー、そして見た者を惑わせるような赤い瞳が特徴の鈴仙・優曇華院・イナバだった。

背中には大きな箱を背負っている。人里に薬を配りに行く途中だったようだ。

「そうよー。あなた、永遠亭の子でしょう？ 友達が体を痛めちゃってね、薬になる草を探してるんだけど、どれが痛みに効くやつか教えてくれないかしら？」

「痛みに効く薬草、ですか？ それなら薬草を集めなくてもいいものがありますよ」

鈴仙は背負っていた箱を下ろすと、中から小さな容器を取り出した。

「それはなあに？」

「師匠の新薬ですよ。使いやすい患部に塗るタイプで筋肉痛、腰痛、関節痛、打撲によく効きますよ」

薬について説明が始まると、人懐っこかった鈴仙の声がどこか事務的になる。

「へえ……」

「内容成分はインドメタシン10mg、これは非ステロイド性の鎮痛消炎成分で、筋肉や関節の痛みをとってくれます。そしてメントールが30mg、患部にひんやりとした清涼感を与えて、痛みやか

ゆみをやわらげてくれます。あとは添加物としてミリスチン酸オクチルドデシル、アジピン酸ジイソプロピル、カルボキシビニルポリマー、ヒプロメロース、ステアリン酸ソルビタン、ステアリン酸グリセリンを配合して効果の持続力と速効性の向上を……」

「あつ、そう！……よくわからないけどすごい薬なのはよくわかったわ。ありがとう。一つ貰ってもいいかしら？」

「ええ、どうぞ……それでは私はこれで失礼します……せつかく覚えたのになあ……」

鈴仙は説明を唐突に切られ、肩を落として去っていく。

「あ、一つ言っておくわ」

「何でしょうか……」

鈴仙はゆっくりと振り向く。

「薬の成分なんて普通の人にとってはどうでもいいから話さなくていいと思うわ。いろいろとありがと、じゃあね」

そう言い残すと雛はまたくるくと回りながら飛んでいった。山には「あんまりだあー！」という鈴仙の叫び声が響いた。

彼は何の気もなしにただ人里の大通りを歩いていた。昼時を過ぎて、またあちこちに活気が戻ってきている。

「兎のお嬢ちゃん今日は元気ないね。何かあったのかい？」

「いえ大丈夫です……はい。落ち込んでなんかいませんから……腰痛の薬でしたね、どうぞ」

「あ、ああ。ありがとう」

「うちの子が風邪引いちゃってね、風邪薬もらえる？」

「はい……」

いつもと違って元気の無い薬売りの兎を不思議に思いつつ、その近くに建つ本屋を見て、最近本屋に寄っていないことに彼は気づいた。今日はとくにやるべき事もないので、彼は久しぶりに本屋に入

ることにした。

「ごめんください」

彼は軽く挨拶をしながら暖簾をくぐる。

「いらっしやい。お、仙道の兄ちゃんじゃないか。久しぶりだね」

店の奥にいた店主が笑顔で返す。

「……何度も言ってますが私は仙道じゃないですし、そのための修行もしてませんよ」

彼は少し苦笑する。

「そうだったっけ？ まあ細かい事は気になさんな。で、今日はどんな本を探してるんだい？」

「……特に探している本は無いですね。最近入った本でおやじさんのおすすめはありますか？」

「そうだな……『突撃！ 命蓮寺！』はなかなか面白かったぞ」

店主は平積みされた本を一冊手に取る。

「……どんな本ですか？」

「毎朝新聞ばらまいてく天狗がいるだろ？ その子が最近できた寺の住職さんとお話する本だよ。所々話が噛み合ってなくて笑えたよ」

「面白そうですね。買います」

「まいどあり、3000円な」

彼の財布に延ばした手が一瞬止まる。

「……高くないですか？」

「お布施込みの値段らしいけど、天狗の言うことだからな、どうだか」

店主は肩をすくめた。

天狗のただの口実かもと思いつつも、彼は買うことにした。

「また暇なときは寄ってくれよ」

「ええ、もちろん」

そんなやり取りを交わしながら彼は本屋を後にした。

空が赤くなり始めた頃、雛が薬を持ってにとりの家に戻ってきた。

「にとりー、薬持ってきたわよー、入るわよー」

返事を待たずに雛は家のドアを開ける。

「……あら、寝てる。待ちくたびれちゃったのかしら。まったく、仕方ないわね」

雛はにとりの腕と脚に薬を塗り、書き置きを書く。

「これでよし、と。しっかり寝るのよー」

雛はにとりに小声で別れを告げ、家から出た。

「……さむっ」

雛が帰ってしばらくして、にとりは腕と脚の寒気で目が覚めた。

「どうしてこんな手足だけ寒い……痛くも無い……あ、書き置きだ。雛のかな」

書き置きには薬を塗っておいたから安心してよく寝るように、と書いてあった。

「雛……ありがと。お節介焼きだとか思ってたごめんね」

にとりは書き置きを読み終わると、今度お礼しなくちゃな、と思いつながら外に出た。雛が塗ってくれた薬のおかげか夜風がいつもより冷たく、心地よく感じられた。

河童と厄神様（後書き）

後書きを書くのは初めてですね。

さかまたです。

今回は初めて盟友以外にとりと関係のあるキャラとして雛を出しました。

雛はなかなかキャラ付けが難しかったです。世話好き、というのは決まっていたのですが……今回は天然が入ったようなキャラになっていました。

雛は好きなキャラの一人ですので、これからもたまに出せたらいいな、と思っています。

番外編：月の兎と月の頭脳（前書き）

今回は番外編です。

にとりたちは出てきません。

番外編：月の兎と月の頭脳

迷いの竹林を鈴仙・優曇華院・イナバはとぼとぼと歩く。落ち込んでいられるのか、いつもはぴんと立っている耳は力無く垂れていた。

「あ、鈴仙おかえりー。今日は夕飯いらないからよろしくー」

彼女が永遠亭の門をくぐると他の兎たちと話していた因幡てゐが声をかける。

「ただいま……」

鈴仙は力無く挨拶を返すとそのままいつてしまった。

「元気ないなあ、鈴仙。師匠に怒られるようなことでもやっちゃったのかね。やれやれ、最近の若いのはすぐ落ち込むんだから……」
てゐは小馬鹿にした口調で首をすくめる。

「うさっ！」

てゐの肩をてゐとは色違いの黒のワンピースを着た兎がぼんぼんと叩く。

「ああ、ごめんごめん。じゃあ話を続けようか」

「うさうさっ！」

他の兎たちがてゐを囲むように座る。

「それから私は鱧に皮を剥がされてしまったね、痛い痛いと言き叫んでいたところをある人が助けてくれたんだ……」

てゐは老人のように木の枝を杖代わりにして再び話し始めた。一言言い終えて振り返ると、既に鈴仙の姿はなかった。（何があったか知らないけど、気負いすぎちゃ駄目だよ……）

「あらウドンゲ、お帰りなさい。今日は遅かったわね、私が夕飯作ることになっちゃったじゃない。まあ、こういうのもたまには悪くないんだけど……あら、いつになく落ち込んで、何かあった

の？」

腰に届く程長い銀色の髪を三つ編みに束ね、割烹着を着た八意永琳が振り向きながらきく。

「師匠おゝ聞いてくださいよおゝ」

鈴仙が永琳に飛びつく。

「あらあら、どうしたの？」

「実は……」

茶の間に移った鈴仙は永琳に今日のいきさつを話した。

「ふーん、厄神様もなかなかきついことを言うのね……」

「ですよねえゝ！ 私すつごく勉強したのに……」

涙をぼろぼろと流しながら話す鈴仙。それを永琳はお茶を啜りながら落ち着いて聞いている。

「ふつつつ、騒がしいと思ったらまた鈴仙が人生相談してるみたいね。さて、今日はどんな永琳節が炸裂するのかしら……」

そして隣の部屋で笑いをこらえながら聞き耳をたてている人影が一つ。艶やかに光る黒い髪に鮮やかな装飾の入った着物を身に纏った、蓬萊山輝夜だ。

「でも厄神様の言うことも一理あるわ」

「ええっ！？ じゃあ今までの私の頑張りは……」

（おっ、珍しく否定から入った）

「だって自分の興味のない話を延々とされるのは聞いている側から見れば苦痛でしかないわ。ウドンゲ、もし姫様が魚の小骨の上手な取り方と刺さったときの対処法について一時間語り続けたら嫌ですよっ？」

「はい……」

（私を例えに出すな！ 鈴仙も即答するな！）

「じゃあ私の話もその類に入っているんですね……」

鈴仙は悲しそうな顔で視線を落とす。

「そうよ。でもね……」

永琳は額に手を当て、深くため息をついた。（あれは永琳節の始まりのポーズ！）輝夜は襖に更に耳を近づける。

「あなたが人里で相手をするのは一人じゃないでしょう？ 薬を貰いに来る人の中には医者のお卵がいるかもしれないし、そういう小難しい話が好き、っていう物好きな人もいるかもしれないし、果てにはあなたがけなげに説明する姿を見るためだけに訪れている人もいるかもしれない……」

（山彦は妖怪の仕業、って話くらいありえないわ……）輝夜もあきれたように額に手を当てる。

「そういう人に薬の成分を聞かれたときに答えられなかったら、周りの人たちの信用を失いかねないわ……」作った人にもよくわからない薬を私たちは使っていたのか……』ってね。二度と来るなど人々に石を投げられるだけならまだしも、最悪の場合そのまま廃業に追い込まれてしまうのよ！」

「そ、そんな……」

（な、なんだってー！……って、ないない、いくらなんでもそれはない）輝夜は首を横に振る。

「そんなことにならないためにも、薬の勉強は欠かしちゃいけないのよ。わかった？」

「はい！ 師匠！ わざわざ相談に乗ってくださり、ありがとうございます！」

（……今日も綺麗に丸め込んだわね。丸め込まれる鈴仙も鈴仙だけど。……もしかして永琳、医者より講師の方が向いてるんじゃないかしら）

「話し込んでしまったわね。ウドンゲ、料理を並べておいて。私は姫様を呼んでくるから」

「わかりました」

（やばっ、部屋に戻らないと）輝夜は足音を立てないようにこっそりと、しかし素早く部屋に戻った。

「カゲヤ、夕飯の用意ができたわよ」

部屋に入ってきた永琳が言う。彼女は昔からの約束で二人だけのときは名前で呼んでいる。

「んー？ ああ、あいわかった」

輝夜はだるそうにゆっくりと立ち上がり、永琳に手を引かれて部屋を出た。夜風が心地よい。

「今日は私が夕飯を作ったの。久しぶりだったから張り切っちゃったわ」

「永琳が張り切るなんて、期待しちゃうじゃない（……鈴仙も少し落ち込んでていいぞー）」

「何か言っただかしら？」

「うっん、なんにもー」

輝夜は目を合わせないようにして答えた。

番外編：月の兎と月の頭脳（後書き）

今回は落ち込む鈴仙を極論で無理矢理元気付ける永琳、というネタが浮かび、ちょうど前回鈴仙が登場したので書いてみました。さかまたです。

わりと思いついたままにやりました。稀なケースですね。どうも私が永遠亭の話を書くキャラがペラペラ喋る話になる気がします。初めて書いたSSにしか出してませんが……永遠亭組は好きです。でいつかまた主役のSSを書きたいなー、と思ったり。

永琳が深刻そうに言えばどんなに嘘くさい話でも鈴仙はコロツと騙されそうです。すぐばらしますが。

永琳「実は蓬莱の薬はね……ただの風邪薬なの」

鈴仙「な、なんだってー」

永琳「嘘よ」

こんな感じに。

扇風機

夏、妖怪の山に小川のせせらぎと蝉の鳴き声がこだまする。一方は涼しさを、もう一方は夏の到来と蒸し暑さを人々に感じさせる。

「ふんふん」

朝からにとりは鼻唄まじりに川辺で機械をいじっている。部屋でやっているのと蒸し暑くなるから、とのことだ。

服装はいつもの水色の作業着のような服ではなく、水色のハーフパンツに黒のタンクトップ、服装だけ見れば少年のようにも見えた。「あとはカバーをはめて……よし、完成！」

にとりはプロペラが入った四角い箱を持ち上げる。

「さあ、早速動か実験だ！」

そう言っでにとりは発明品を抱え、意気揚々と自分の家に戻っていった。

「ただいま……うげ」

ドアを開けた彼女を待っていたのはむせ返るような熱気だった。

薄着だというのに汗がとめどなく流れる。

「あつっ……どうして窓閉めたんだろ。こうなるのはわかりきってたでしょ……もー、私のバカ」

まあ、この扇風機ですぐに涼しくなれるさ、と彼女は気持ちを切り替えて中身がぎっしりと詰まった道具箱から蓄電池を取り出し、扇風機を繋ぎ、扇風機のスイッチを入れる。電気力でモーターが作動し、プロペラによって涼しく、心地よい、暑い夏を吹き飛ばす風が発生する……

「おー、涼しく……ない……」

ようなことはなく、プロペラは目に見えるほどゆっくりと数回転すると止まってしまった。

「えー、なんでかな……、まさか」

にとりにはつと蓄電池のメーターを見る。メーターは残量ゼロを表すEの部分を示していた。

「なあんだ、バッテリーが切れてただけかあ……根本的な問題じゃないか、使ったら充電は徹底しないとなあ……こんな暑いのに充電するの、やだなあ……」

彼女は不満を漏らしながら部屋の隅に鎮座する自転車に跨がった。

この自転車はもともと香霖堂に置かれていたものだったが、舗装などされていないため路面が悪く、ほとんどの妖怪は急ぐときは空を飛ぶので自転車など幻想郷では無用の長物である。店主の森近霖之助もたいして気に入ることもなく、前述の理由で売れもせず、香霖堂の隅で埃を被るだけの存在になっていた。そうして持て余していたところをとりは譲ってもらい、今はこうして発電器として使っている。

「うおおおおおお！」

にとりは一心不乱に自転車をこぐ。外を走れば空を飛ぶ霊夢にぎりぎり追い付くことができるかもしれない程度の速さだ。

十数分こいただろうか。自転車に付けられたベルが鳴る。充電完了の合図だ。

「お、終わったあ……」

にとりはペダルから足を離す。だがペダルはそのまま回りつづけ、にとりのくるぶしをしたたかに打つ。

「あつ、つつ……」

安堵の表情から一転、声にならない叫びをあげ、苦痛の表情を見せたにとりは自転車から転げ落ちた。しばらくそのままうずくまっていた後、にとりはそのまま這って扇風機の前に向かう。窓を開け、換

気した方がどう考えても早いが、そんな選択肢は彼女にはなかった。彼女を今動かしているのは好奇心と、扇風機の生み出す涼しさへの期待感だった。

「へ、へへ……」

部屋中をはいずり回り、ようやく扇風機の前に辿り着いたにとりは、待ってましたと言わんばかりに扇風機の電源を入れ、風の強さを一番強い「台風」に入れた。

「わぁお……」

虚ろだった彼女の目に光が戻っていく。体からはいまだに風で乾かしきれないほどの量の汗が流れ出し、床に人型の染みを作る。

「……しあわせー」

このしあわせはみんなにも分け合わなければ、と彼女は思い、しばらく涼んだ後早速二個目の扇風機を作ることにした。

昼時を過ぎた頃、家に訪問者がやってきた。

「にとりー、入るよ……うわ」

彼が家に入ると、むせ返るような熱気が肌にまとわり付いた。床には大きななめくじが這ったかのようにぬめった黒い跡が残っている。おそろくにとりの汗だろう、と彼は思った。

「おお、その声は盟友だね……よく来たね。ちょうどよかった、今この恐ろしく暑い、灼熱地獄のような夏を乗り切る道具ができたんだ」

にとりは扇風機の風で元気を取り戻したとはいえ、まだしんどいようだ。二人は挨拶代わりに手を合わせる。彼女の手は汗でぐっしよりと濡れていた。

「おおっ……それより窓締め切ってて家の中すごく暑いけど、にと

りは平気なのかい？」

盟友は家の窓を開けながらきく。熱気の籠った家の中に外の比較的涼しい風が入ってくる。

「へいき、へいき。……この扇風機があれば、ね」

にとりは轟音を響かせながら風を送る、四角い箱を指さした。

「扇風機？ 涼しそうだけど、ずいぶんとやかましい機械だね」

「ああ、それは安心しておくれ、盟友。使ってるモーターがこれだけは無駄に強いやつになってるからさ。普通のモーターにしとけばそんなにやかましくはないはずだよ」

「そうかね？」

「構造は簡単だから結構楽に作れるんだ。とりあえずもう一個できてるから、盟友にあげるよ。あと、電源用に工具箱から適当なバッテリーを持って行ってね」

「本当かい？ ありがとう。早速今夜使ってみるよ」

今夜も暑いだろうしね、と付け加えると、盟友はにっこりと笑った。

「いやあ、喜んでもらえたみたいでよかったよ。さて、私は今から他の友達に渡す分の扇風機を作るつもりなんだけど、手伝ってくれるかい？ 盟友」

「そうだね……まあ、ここまで来たんだし、手伝わせてもらおうかな」

少し腕を組み考えた後、盟友は頷く。

「ほんと？ 悪いねえ、それじゃあ早速だけどその工具箱からレンチ持ってきて」

にとりは作業を再開し、空いた片手で隣に置かれた箱を指さす。

「はいはい」

「それから接着剤とフェムトファイバー、あとジャンク箱から单相誘導モーターを、それに……」

遠慮なくこき使おうとするにとりを見て、長い一日になりそうだと彼は思った。

長い手伝いが終わり、彼はようやく家に帰ってきた。日は既に沈んでいる。

「……まだ暑いな。早速使ってみようかな」

彼は扇風機を立て、発電器を回す。数分間回し続けて、疲れきたところで扇風機のスイッチを入れる。

「おお……」

プロペラが回り始め、春のそよ風のような心地よい風が流れる。

「家にいながら涼しい風を感じられる機械……いい夏の風物詩になるかも」

彼は呟いた。

日がすっかり沈んだ頃、にとりの家に再び訪問者がやってきた。

鍵山雛だ。

「こんばんは、にとり。今日も暑かったわね。元気だったかしら？
彼女は片足を引き、スカートを軽く持ち上げてにとりにお辞儀をした。

「こんばんは、雛。おっそろしく暑かったけど、元気だよ。あ、昨日は……その、いろいろとありがとね」

にとりは挨拶を交わし、照れ臭そうに礼を言った。

「あら、友達なんだからお礼なんていいのに。でも、ありがとうって言われるのはやっぱり気分いいわね……どういたしまして」

「でさ、お礼と言っちゃなんだけど、私を作った（盟友も手伝ってくれた）発明品をあげるよ」

にとりは扇風機を指さす。

「不思議な箱ねえ……」

「扇風機って言うんだよ。天狗様みたいに風を起こせるんだ」

「へえ、風を起こす機械ね……」

雛は不思議そうに扇風機を眺めている。

「使い方はね、すつごく簡単なんだよ！ まずこの手回し発電器で電気を作って、そのあとは扇風機の電源を入れるだけ。ね、簡単でしょ？ 原理はね……」

「……私は機械に詳しくないし、話を聞いてもよく理解できないと思うから原理までは説明はしなくていいわ。ごめんね」

雛は申し訳なさそうに、だがつっぱりと言った。

「そう……まあ、いいや！ 雛、早速使ってみてよ。充電は済んでるからスイッチ押しだけでいいよ」

にとりは少し落ち込みながらも手に持てる程小さな扇風機を雛に渡し、雛は言われた通り、スイッチを押す。すると、心地よいそよ風が流れだした。

「まあ素敵……」

「でしょでしょ？」

雛のほころんだ顔を見てにとりも嬉しそうに笑う。

「そうだ！ こんなふうにも遊べるんだよ。……あー」

にとりが扇風機に向けて声を出すと、声がしゃがれて聞こえた。

「ね？ 面白いでしょ？」

「ふふ、あなたは本当に楽しいことを考えつくわね」

「えっへん！」

雛にほめられ、今度は自慢げに胸を張るにとり。傍から見ると親子のようにも見えた。

「ねえ、にとり」

「なあに？ 雛」

「これを使って、お空を飛べないかしら？」

「それは……さすがに無理だよ」

「あらあら」
雛はおどけたように笑った。

扇風機（後書き）

今年の夏は節電で扇風機が大活躍してますね。
さかまたです。

河童の科学力はどこかが異常に高く、しわ寄せでどこかが極端に低いイメージがあります。ロマンがないから研究しない、という分野もありそうですね。

河童と白狼天狗

窓から朝日が差し込む部屋に、じゃらじゃらと駒を転がす音の後、
ばちん、という音が響いた。

「……王手、これで詰みだね……私の勝ちい……」

にとりは伸びとも取れるほどゆっくりと両腕を空に突き上げる。
目の下には薄く黒い隈が浮かんでいる。

「ああー、連敗かあ……」

修験者のような装束に身を包んだ犬走椀は逆にがっくりと肩と耳
を落とし、うなだれた。

「さて、次は何して遊ぼうか。本将棋は飽きたし、回り将棋でもし
ようか？ それとも挟み将棋？ あ、崩し将棋もいいね……」

「……少し将棋から離れようか」

椀は眠い目をこすりつつ、将棋はもううんざりだ、というような
表情で言った。さすがに『天狗一の将棋狂い』とまで言われる椀も、
夜通し将棋三昧というのは堪えたらしい。

「そう？ じゃあ、運動でもする？」

にとりは部屋の隅に鎮座する発電用の自転車を指さす。

「いや、それ遊びじゃないし……それに久しぶりの非番の日なのに、
そんな労働まがいのことしたくないよ」

椀は肩を軽く回しながら言う。

「えー、充電完了までの時間を競うのとか楽しい……んだよ？」

「嘘つけ」

「あ、ばれた？ ごめんごめん」

「ほんつと、にとりは嘘が下手だね」

にとりのつく嘘はすぐにはれる。嘘をついたときにいきなり目を
そらしたり、手がせわしなく動いてしまうからだ。

まあ、屈託のない笑顔でさらりと嘘をつくあの人に比べたらわか
りやすいことはいいいことなのだが、と椀は思った。

「は、ハハハ。……お酒飲む?」

にとりは氷水がなみなみと入った箱から一升瓶を取り出した。

「はぐらかさないの。それにこんな朝から酒飲むとか、鬼じゃあるまいし……まあ、休みだしいつか」

椀ははにかみながら差し出された猪口を手に取る。

「そうそう、ずっと仕事づくめじゃあ息も詰まるでしょ? たまには息抜きも必要だって。ささ」

にとりが猪口に酒を注ぐ。

「うーん、趣味で生計立ててるにとりが言つとなんだかなあ……」

「えー」

「はは、何はともあれ、乾杯」

「うん、乾杯」

二人は猪口をかちやん、と音をたてて合わせると、一気に中身を飲み干した。

「うん、美味しい。どんちゃん騒ぎの宴会もいいけど、親友と静かに飲むのもいいもんだね」

椀が言う。

「だね。……そうだ! つまみにきゅうりの漬物はどうだい?」

にとりはうんうん、と頷きながらと壺からきゅうりを取り出し、

椀に渡す。

「にとりはきゅうりが好きだね。じゃ、頂こうかな。……辛っ!」

「あ、やっぱり?」

「やっぱりって……」

「しかしこんな朝から飲んでるとき、文さんが『宴会と聞いて飛んできました』とか言ってやって来そうだね」

「え!?!」

椀は急に立ち上がると窓から身を乗り出し、辺りを見回した。外は蒸すように暑く、じいじいと蝉が鳴くだけだ。

「……よかった、あの人はいない」

にとりは文の話の始めた途端いきなり慌てだした椀を少し不審に

思った。

「……そういえば椀」

「何かな？ にとり」

「椀は文さんのこと、どう思ってるの？」

天狗の社会は完全なタテ社会だ。部下が上司を立てるのは当然とされている。

「えー？ ……いつも明るくて、人当たりもいいし、いい人だと思うよ」

「本音は？」

そのため上司の悪口など素面なら口が裂けても言えない。だが酒の席で、しかも二人しかいない状況なら何か聞き出せるかも、ということでにとりは深く踏み込んだ。

「ちよつとめんどくさい人……仕事中に気にせず話し掛けてくるのはやめてほしいなー、とか」

「あー、うん」
ビンゴ。

「この前忙しいから話しかけないでください！ って怒ったら次の日の新聞に誇張されて書かれてたし……」

椀は猪口を傾け、空にする。

「あー、あれね……」

あの日の大見出しは『低下する下つ端天狗のモラル！』だった。

彼女には悪いと感じながらも、あの時は腹を抱えて笑ってしまったことをにとりは思い出した。

「あれ大天狗様が真に受けちゃってさ、あの後こつぴどく叱られちゃったんだよ。『上司に手を出すとは何事だ』ってさ……ああもう椀は、目に浮かんだ涙を拭い、猪口を傾ける。

「……悪いね。なんか湿っぽい話になっちゃって」

「いや、私は平気……だよ？ うん」

嘘。こうした話は聞いていると自分もつらくなるのでにとりは苦手だった。

「そう？　じゃあもう少し私の話を聞いてくれるね？」

「ありゃ……うん」

わかりやすいと言っていた嘘を見抜けなかった、これはかなり酔っているな、とにとりは思った。

「……もう職権濫用とかそういう次元じゃないんだって！」

「うん……うん」

椀の愚痴が始まって一時間程経った。床には空の瓶が数本転がっている。にとりはもう勘弁してくれ、という表情をしているが椀は気づかない。

「……上司の前とか取材のときだけいい子ぶっちゃってさあ！」

ふいに騒がしかった蝉の鳴き声が止み、部屋にさっと涼しい風が吹き抜けた。

「もっと部下にも優しくしてくださいよ、文さんの馬鹿あ！」

「もみじー？」

誰かが彼女の肩をたたく。

「誰ですか！　今いいところ……る」

振り向いた彼女の前には短く切られた黒い髪に小さな帽子を被り、首からカメラを提げた射命丸文がとてもいい笑顔で立っていた。

「あ、あああ文さん！？」

急に椀の顔が青ざめる。いきなり極楽から地獄に真っ逆さま、といったところだろうか。

「ふふふ……見つけましたよ椀。朝からこんなに飲んで……日ごろの鬱憤は晴れましたか？」

「め、めめめ滅相ありません！　お、お許しを……」

椀は床に頭をこすりつける。もし床が熱い鉄板だったとしても謝り続けるだろう、というくらい勢いよく。さすがに見えていられない

のでにとりは目をそらした。

「あやや？ 私に何か謝ることがありましたか？ ……それは置いて、今からなんでも喰うとかいう死体を取材しに行くのですが……休みのところ申し訳ありませんが、椀も来て頂けますか？」

「よ、喜んでご一緒させていただきます！」

椀はふらふらと立ち上がり、文に最敬礼した。

「心意気は買いますが……ずいぶんと酔っ払っているようですが、大丈夫なのですか？」

「大丈夫です！ 足手まといにはなりませんから！」

「そうですね。では椀、行きましようか。お仕置きはその後ですよ」

「ひっ……」

「それとこれとは別ですからね。……あ、にとりさん」

窓に足を掛けたところで文がにとり振り向く。

「な、なんでしょうか」

にとりもつかしこまってしまった。

「部下がご迷惑をおかけしました」

文は事務的に軽く頭を下げる。

「いえいえ」

「これからも仲良くしてあげてくださいね？」

「も、もちろんです！」

事務的な表情から一変して満面の笑みを浮かべたのでにとりは少し驚いてしまった。天狗とはこうも変わるものなのだろうか。

「では私たちはこれで」

「あ！ ……」

窓の棧を蹴って二人は飛び立った。玄関から出てほしかったが、それを口にする暇もなかった。

「行ってしまった……」

にとりは散乱した瓶を拾い集める。

「さて、雛か盟友でも呼んで飲みなおそうかな。あ、雛呼ぶと『昼から酒ってどうなのかしら?』って言われるな……じゃあ呼ぶとしたら盟友だな。じゃ、準備するかな」

彼女はいつも酒を入れている箱を開ける。

「……な、ない……」

箱には氷水が入っているだけで、酒瓶は一本もなかった。にとりはがっくりと肩を落とした。

河童と白狼天狗（後書き）

暦の上ではもう秋らしいですね。
さかまたです。

文はなにかと絡んでくるちょっと鬱陶しい上司というイメージなんです、書いてみるとイメージからズレてしまった感が……

土蜘蛛

「……よいしょ、よいしょ」

一人で暮らすにも窮屈になってしまっただけで、ほとんどの機械や発明品が並べられた部屋で、にとりはリュックサックに大量の荷物を詰め込んでいた。

「んー、まあこれくらいでいいかなー」

発明品やら何やらで荷物でぱんぱんに膨れ上がったリュックを背負うと、にとりはドアを開ける。

「いつてきま……ぐえ」

意気揚々と出発しようとしたにとりであったが、リュックが大きすぎてドアに引っ掛かり、負い紐が首にかかる。

「荷物を詰め込みすぎてドアから出られない？ ならば
にとりは部屋に戻って窓を開け、外に出る。」

「窓から出ればいいだけのこと！ ……今度はこうならないように帰ったらドアおつきしょ」

大きく膨れ上がったリュックを背負って窓から出てくる様は、泥棒にしか見えなかった。

「あらにとり、おはよう。窓から出てくるなんて泥棒ごっこでもしてるのかしら？」

空から聞き慣れた声が響く。山一番のお節介焼き（にとり談）の鍵山雛だ。彼女はくるくると回りながらにとりの前に着地する。

「あ、雛。おはよ。今日はね、椀が誘ってくれたから地獄の温泉に行ってくるんだ」

「あつ、そう！ ……お土産期待しても良いのかしら？」

白い歯を輝かせながら、厄不足そうな笑顔で雛は言った。

「んー、何が欲しい？」

最近毎朝彼女はこの調子なので、特に言及せずにとりは続ける。

「なんでもいいわよー。……おいしいお酒をよろしく」
「うん、わかった。お土産、期待しててね！ じゃあねー」
「期待しないで待ってるわよー」
雛は穏やかな笑顔で走っていくにとりを見送った。空は綺麗に晴れ渡り、山には秋らしい雰囲気漂っていた。

地底につながる大穴の前で、犬走椛は親友を待ち続けてかれこれ三十分ちかく経っている。

「遅いなあ、にとり……」

河童はお気楽で、マイペースな種族だ。約束の時間に遅れてやってくるなどしょっちゅうである。河童どうしの待ち合わせならどちらも遅れてくるので問題はないが、河童を待つ側にとってはたまったものではない。

「椛ー、おまたせー」

「遅いよもう……」

椛があきれながら言う。

「あー、ごめんごめん。……しかし休みをくれるなんて文さん優しいね」

「うん、取材に付き合ってくれたお礼に休みを増やすように大天狗様に掛け合ってくれたんだ。……優しいのか厳しいのかやっぱりよくわかんない人だよ。いい人なのはわかってるんだけどね」

椛はやれやれ、といった表情で肩をすくめた。

「さて、それじゃあ飛び込む前に……やっほー！」

にとりは深さを調べるために大穴に向かって叫んでみた。大穴から声が返ってこなかったところを見ると、かなりの深さのようだ。（代わりに少し遅れて山のほうから「ヤッホー」という声が返ってきた）

「……うん、この深さなら落下傘を持ってきたかいがあったってもんよー！」

にとりは大きなりユックサックから小さめのリュックサックを取り出す。

「落下傘？ それはなんだい？にとり」

椀は不思議そうに言う。

「これは人間が高いところから降りるときに勢いを殺して安全に降りるための道具だよ。開き方はね、このヒモを……」

「ああ、説明はしなくていいよ。早く行こう、ね？」

「むむむ……わかったよ」

にとりは話の骨を折られたため、少し不満そうに答える。

「準備はいい？」

「もちろん。……せーのっ！」

二人は同時に穴に飛び込んだ。

椀はそのままの勢いで、にとりは落下傘を開いてゆっくりと地底に降りていった。

深い深い地の底は、ここまで陽の光が届くためか、はたまたそこらどころに淡く光るキノコが生えているためか、彼女たちが想像していたよりも明るい。

椀は勢いよく、にとりは風に揺られてゆっくりと地底に足を着けた。

「にとり、別にそれいらなかったんじゃないの？ 私はそのまま落ちても平気だったしさ」

「……ちつつち、わかってないなあ椀は。こういう無駄や面倒があるからこそ一生は面白いんじゃないか。もっと椀も私のようにゆったりとした、何にも動じない心を持たなきゃ……」

にとりは落下傘を畳みながら苦し紛れに言う。

「おや、地底に遊びに来たのかい？」

背後から聞こえた声に二人が振り向くと、そこには八つのポタンのついたゆったりとしたスカートを着、金色の髪を後ろで纏め、それを茶色のリボンで留めた黒谷ヤマメが立っていた。

「げえっ！ 土蜘蛛！」

にとりが条件反射的に叫ぶ。

「なんだい、会って早々にその言い草は」

「椀、先に行つて。私はこいつをぎつたんぎつたんにしてやつてから行くからさ」

にとりはヤマメの不平をさえぎり、いつになく鋭い目つきで言う。

土蜘蛛は毒を操る能力を持ち、水を汚すということで河童から恐れられていた。土蜘蛛は多くが地底に住んでいるのでそのようなことは杞憂だったのだが、土蜘蛛は毒で水を汚す、という話が一人歩きしてしまったため、河童の中には土蜘蛛を毛嫌いするものも少なくない。にとりもそのうちの一人だ。

「……すみませんね、なんか巻き込んでしまつて」

「いいんだよ、何はともあれ地底にようこそ。地獄は賑やかで良いとこだよ。地獄がくつろぐ、つてのもなんかおかしい感じもするがね」

椀はヤマメに深く頭を下げると、ヤマメは快活そうに笑つた。椀は彼女がにとりに対して怒っていないことに少しほつとした。

「じゃあ、先に行つてるからね。気が済むまでやられたらにとりも追いついてきてね」

「はいはい……って、なんで負けること前提なのさー！」

「さて、気を取り直して……ここで会つたが百年目、覚悟してもらひよー！」

にとりはヤマメを指さして叫ぶ。

「やれやれ、今日はそんな気分じゃないんだけどねえ……」

戦う気満々のにとりとは反対にヤマメはあまり乗り気ではないようだ。

「問答無用！ いざ、勝負！」

「はいはい、勝負勝負。……ちょっと桶借りるよ、キスメ！」

ヤマメが叫ぶと、空からにとりの頭めがけて子供が一人入れるほどの大きさの桶が降ってきた。

「あぶなっ！」

にとりがとつさに尻餅をつきながら避ける。

「おっ、あれを避けるとはあんたなかなかやるねえ」

ヤマメは小さい子供をほめるように言う。

「でも、それだけじゃあねえ。はい、確保」

そのままヤマメは糸で尻餅をついた体勢のにとりを絡めとる。大言壮語を吐いたにとりの戦いは、あっけなく終わった。

「はなせー！ 外道ー！」

「まあまあ落ち着きなつて。あ、暴れても無駄だよ。あたしの糸は鋼鉄よりも硬いんだからね」

「はなせー！ ……え？ なにそれすごい！ どういうこと？」

さっきまでの恨みがましい目つきから一転、好奇の目にとりはやマメを見る。

「ん？ あんたそんなことに興味があるのかい？」

ヤマメは不思議な生き物を見るような目でにとりを見る。

「もちろん！ こんな細い糸なのに、鉄よりも硬いなんて気にならないほうがおかしいでしょ？」

「噂には聴いてたが……河童ってのは変わってるねえ」

ヤマメはぼそつ、とつぶやく。

「そういえば、どうやったらこの糸はほどけるの？」

ヤマメは少し考える。あまり悪い奴ではなさそうだが、

「あたしを含めこれから土蜘蛛に喧嘩を売らないって言うなら教えてあげてもいいかな」

「もちろんです！」

考えるまでもなく、にとりは即答した。ヤマメは少しうるたえてしまっほどの早さだった。

「な、ならばよし！ 教えてあげよう。こっぴどいんだ、こっぴどい罪人ども。この蜘蛛の糸はおれのものだぞ。お前たちは一体誰にきいて、のぼって来た。下りろ。下りろ」ってね

にとりはその言葉を復唱する。すると、不思議なことにくら暴れても切れなかった蜘蛛の糸はぷつりと音をたてて切れてしまった。

「おお！ なんで？」

にとりは目を白黒させる。

「使ってるあたしにもよくわかんないんだよ。昔からの言い伝えなんだ」

ヤマメは肩をすくめる。

「へー、土蜘蛛って面白いね」

「なあに、嫌いな奴にまで『どうして？』って訊けるあなたの方がよっぽどおかしい……もとい面白いさ」

にとりが笑うと、つられてヤマメも笑う。

「そうだ！ この糸もらっちゃっていいかな？ 何かに使えるかもしれないし、研究したいからさ」

「構わないよ、へるもんじゃなし」

「本当？ ヤマメさんありがとう！」

にとりは笑顔で頭を下げる。

「おいおいヤマメさんはよしておくれよ。ヤマメでいいんだよ」

ヤマメは照れくさそうに頭をかく。

「……ほ、ほら！ 友達を待たせてんだろ？ 早く行ってやりなよ」

ヤマメは早く行けとにとりの背中を押す。

「あ、そうだった。じゃあね、ヤマメさん……」

だから呼び捨てでいいって、とヤマメが言いかけたときにはとりはもう走り去った後だった。

「やれやれ、旧都の鬼どもが一番だと思ってたけど、地上にも騒がしいやつがいるもんだねえ……」

ヤマメはぽっかりと空いた穴を見上げる。その先には米粒ほどの大きさの青空が映った。

旧都の旅館の一室にどこか嬉しそうな表情を浮かべて、にとりが入ってくる。

「ずいぶん遅かったね、にとり。あの人には勝てた？」

「いんや、すぐにやられちゃったよ」

「ふーん……その割には嬉しそうじゃない」

「ふふん、まーねー」

「ちょっと気になったんだけど、その糸はなんだい？」

椀は枝に巻かれた糸を指さす。

「これ？ これはね……仲直りの証、ってところかな」

にとりは少し照れながら笑った。外からはいつもと変わらぬ旧都の賑やかな喧騒が聞こえていた。

土蜘蛛（後書き）

今回もいやに会話が多くなってしまいました。
さかまたです。

蜘蛛の糸って同じ太さの鋼鉄の五倍の強さだとかききます。 ですから無慈悲な心を持っていると簡単にぶつつりと切れてしまっただよね。

面白いですがなかなか扱いづらそうな代物です。

旧都

「さてと、そろそろ温泉を堪能しに行くとしますか！」
にとりはリュックから風呂桶を取り出し、手ぬぐいと石鹸を入れる。

「そうだね、誰かさんが遅れてきたおかげでちょうどいい時間になったよ」

椀は部屋に備え付けの風呂桶と手ぬぐいを手に取りながら軽く皮肉っぽく言う。

「いやあ、照れるなあ」

「褒めてないよ、もう」

長い廊下からん、からんと下駄で歩く音が二人分響く。床は板張りで、顔が映りそうなくらい磨かれている。下駄で歩くと傷がつきそうで、にとりは少し磨いた人に申し訳なく感じた。

「浴場ってどれくらいでつかいのかな？ 泳げるくらいかな？」

「泳ぐのは行儀悪いよ、にとり」

「冗談だよ、冗談」

「にとりが言うのと冗談に聞こえないんだよなあ……ん？」

「すみません、ここまで来ていただいたのに……」

二人が入口の大広間まで来ると、なにやら短髪の女性が眼鏡を掛けた痩せぎすの男性にぺこぺこ頭を下げていた。

「ソフフ、あなたのせいではありませんよ。さて、気晴らしに酒場をはしごしましょうか。さしあたり十軒ほど。ここのお酒は美味しいと聞きますしね」

「……はは」

女性は苦笑すると、男性の後をついて旅館の外へ出ていった。

「何かあったのかな？」

「さあ？」

椀は肩をすくめた。

「ま、いつか。気にしない気にしない。すいませーん！ 温泉入りたいんですけどー」

にとりはぱたぱたと受付の方へ走っていく。

「ええっ！？ 温泉に入れないうってどういうこと？」

しばらく受付で話していたにとりが大声をあげると、椀もどうしたどうしたと走ってくる。

「すいません。さつき仙人と名乗る方がいらして『この温泉からは危ないガスが出ていて危ないから客を入れてはいけない』とかなんとか……」

受付の気弱そうな青鬼が申し訳なさそうに頭を下げる。

「えー、そんなあ……」

「ほんと、すいませんねえ。こればかりは何ともなりませんから……」

「うー、椀はどうする？」

にとりは落ち込んだ表情で振り返り、少し困った顔をしている椀を見る。

「……ちよつと文さんに連絡しないと。すいません、ここに電話つてありますか？ 妖怪の山につながるの」

「はい、あちらに」

二人は受付の指さした方向を見る。そこには黄緑色の電話機が十数台置かれていた。

ここ最近いきなり増えたらしい。

「長くなるかもしれないから、にとりは好きに街をまわっていいよ。終わったら向かいの居酒屋で飲もう」

「……うん、わかった。また後でね」

にとりは蜘蛛の糸の強さをその仙人とやらに会ったらとことん文句を言つてやるう、と思つた。

「さて、えーっと？」

椀は受付でもらつた硬貨を入れ、見慣れないブッシュホンに少し戸惑いながら上司の家の番号を押した。

秋の神が張り切っているからだろうか、妖怪の山の木の葉はもう鮮やかに色づき始めている。

「いいですかはたて、新聞というのは話題の新しさ、オリジナリテイ、そして何よりもインパクトが重要なのです！」

小綺麗にまとめられた部屋で射命丸文は雄弁に語る。机の上の書類は整然と並べられ、天井に縦横に張り巡らされた糸には写真が吊るされている。

「まあ、私も今まで新聞やってきて痛感してるけどさ……文が偉そうに語るほどのもんじゃないよ。そこまで私も馬鹿じゃないし……」
茶髪を紫のリボンでツインテールに束ねた鴉天狗、姫海堂はたては片腕で頬杖をつき、もう片方で前髪をいじりながら気怠そうに言う。

「そう！ そのだるそうな話の聞き方！ まずそこからいけないのですー！」

文は大げさに仰け反りながらびしっ、とはたてを指さす。毎回歌舞伎か少年マンガのワンシーンのようなオーバーアクションをされてははたても暑苦しくてたまらない。

「まずは記者として相手の話を聞く態度をイチから
じりりん、と電話の鳴く音が文の言葉を遮る。」

「……電話だよ、文」

「わかってますよ……今いいとこなのに……はい、清く正しい射命丸でございます」

「……嘘つけ」

文の変わり身の速さに呆れ半分、感心半分で頼杖を突きながらはたてが眩く。これほど裏表がはつきり変えられる妖怪も少ないだろう。彼女の幻想郷最速とは飛ぶ速さだけではないらしい。

「もしもし、文さん？」

椀は無事に電話がつながったことにほっとした

「ああ、椀ですか。旧都はどうです？ 楽しんでますか？」

「ええ、まあ。皆さん気さくで優しいですし」

「椀い、それは私への嫌味ですかあ？」

「ま、まさか！ そのようなことは微塵も……」

いきなりうるたえ始める椀に文はくすつ、と笑った。

「冗談ですよ……あ、取材はどうなってますか？」

文は最後に声を少し低くしてきく。

彼女の言う計画とは、椀に温泉（特に女湯）を撮ってきてもらい、それを載せることで新聞の妖怪の山での講読者を伸ばそうという、楽園の最高裁判長に即地獄行きにされそうな計画だ。

「あー、その件なんですがね……」

椀は申し訳なさそうに温泉が閉鎖されてしまったことを話した。

「はあ！？ なんですかそれは！」

「つまり文さんの計画は失敗ということに……」

「………わかりました。椀、取材はもういいです。せつかくですし、あなたは『休暇』を楽しんでください。では」

文は精一杯穏やかな口調を繕い、椀の返事を待たずに乱暴に受話器を床に叩きつける。受話器越しに椀とはたての「ひっ」という声が重なる。しばらく呆然と立ち尽くした後、文は凍りつくような笑顔ではたてをじろりと見る。

「な、何よ」

「……はたて、鰻屋にいきましょ？ こんな日は飲まなければやっ

ていられませんから」

「ちよ、ちよっと！」

文はひきつった笑みを浮かべながら無理矢理はたての手首を掴む。
「あ、一緒に来てもらいますけどはたて、あなたのぶんはちゃんと
払いなさいね。いいですね？」

「ひでえ……」

はたては新聞のこと以外に関しては文は反面教師だな、と引きず
られながら思った。

「……文さん怖い」

電話越しに一部始終を聴いた椛は率直な感想を呟き、はたての無
事を祈ってから、旅館を後にした。通りの騒がしさと明るい雰囲気
が少し、今の椛には残酷に感じられた。

旧都の外れには真赤な橋が架かっている。その橋の先にあるのは、
提灯や篝火の灯が照らす旧都とは異なる、真つ暗な闇。

名前は誰が呼んだか渡る者が途絶えた橋。旧都がいつの間にか観
光地のような扱いをされるようになった今では名前負けしている気
もしなくもない。

「さーて、ヤマメさんの蜘蛛の糸は実際どのくらい強いのかなー？
実験実験！」

にとりは竿を軽く振って川に釣り針を投げ入れる。

「……釣れないなあ」

待つこと三十分、未だに竿はぴくりとも動かない。

「あら、ここで釣りをするなんて物好きもいたものね」

にとりに声を掛けたのは、透き通った碧色の眼にくすんだ枯草色

の髪をした嫉妬の塊、水橋パルスイだった。

「あなたみたいな子じゃあここの川の奴らは釣れないわよ」

「むかつ！」

「そうね……だいたい」

「おーおー河童のお嬢ちゃん、こんな美人を釣り上げるたあ、大したもんだ！」

「……あいつぐらいガタイがよくなるちゃ」

パルスイは少し赤面しながら空色の着物を着、手には杯を持った鬼の四天王『力の勇儀』こと星熊勇儀を指さした。

「ははは、パルスイ、なに赤くなってるんだい？」

「……あなたの無神経さを見てて恥ずかしくなったのよ」

「おいおい、心外だなあ。あたしゃとつてもナイーブな奴なんだよ？」

「あなたみたいなのがナイーブなら、幻想郷の奴らはみんなあなたにちよつと声を掛けられただけで血を吐いて卒倒しちゃうくらいナイーブってことになるわね」

「ははは、違いねえ」

パルスイの鋭い返しにも、勇儀は快活そうに笑う。

「あ、あの〜」

「おっと、仲間外れにして悪かったね。どれ、お詫びにあたしがここの釣りの見本を見せてあげよう」

勇儀は持っていた杯を置き、にとりの釣竿を借りる。

「河童のお嬢ちゃん、釣りってのは待つことが肝要だ。だがな……」

勇儀は餌を袋ごと川に放り込む。するとにとりが見たこともないほど大きな魚の影が餌に迫る。

「たまにはこつちから動くってことも必要だ！」

その大きな影めがけて勇儀は竿を思い切り振り上げ、釣り針を投げ込んだ。投げ込まれた釣り針は勢いよく影に突き刺さる。

「よし、かかった！……おらあ！」

獲物がかかった、というよりも引っかけたの方が正しい。勇儀は

力いっぱい竿を引くと、三メートルは優にある大魚が宙を舞い、水しぶきが真赤な橋の欄干をぬらす。あまりの迫力にとりは軽く悲鳴を上げて腰を抜かしてしまった。

「パルスィ、ちょっと竿、持っててくれ」

腰を抜かしているにとりとは裏腹に、全く微動だにせず隣に立つパルスィに勇儀は釣竿を手渡すと、指を鳴らしながら大魚を視界の真ん中に収め、

「ふっ！」

拳を大魚のどてっ腹に叩き込んだ。大魚は地響きを立てて倒れこむ。いつの間にか集まっていた野次馬から割れんばかりの拍手が巻き起こる。

「……とまあ、こんな感じかね。ここいらの魚は地上のやつらよりちつとばかりでかいからね、身体の小さい嬢ちゃんには分が悪いかな」

勇儀はまだへたりこんでいるにとりの手を取って立たせると、パルスィは黙ってにとりに釣竿を渡す。

「あ、ありがとう……」

「素直にありがとうと言えるあなた、妬ましいわ」

パルスィはにっこりと笑って言った。台詞と表情とのギャップにとりには目を白黒させる。

「ははは、悪いね。こいつはなんでもかんでも妬ましく感じちまう困ったちゃんなんだ。こんなに頼りになる奴が身近にいるってのによお」

「あら、お節焼きの間違いじゃないかしら？」

「ははは、こいつめ」

パルスィがさかさず修正すると、勇儀は彼女を小突いた。

「さーてパルスィ、今からこの……ええと」

「川鮭ね」

「そうそう、川鮭を肴に一杯やろうと思うんだが……一緒に飲まないかい？」

「ふふ、喜んで」

勇儀が照れくさそうに頭をかきながら聞くと、パルスィはそれに笑顔で返した。

「お嬢ちゃんも頑張ってるな」

「は、はいっ！」

大魚を引きずりながら和気あいあいとした雰囲気では二人が去っていくと、ざわざわと騒がしかった野次馬達もそろそろともと来た道を引き返して、多くは通りに乱立する酒場に入ってしまった。彼女の一本釣りの話題を肴に飲み明かすのだろうか。

「……熊みたいな人だったなあ」

一人橋の上に残されたとりは小さく呟いた。

「まだ釣れない……どうしてかなあ？」

それからさらに一時間にとりは釣糸を垂らしているが小さい魚すらかかる気配がしない。

「釣れますか？」

「ひゅい!？」

もうやめようかな、そう考えていた矢先に声を掛けられ驚いたにとりが振り返ると、桃色の髪にシニヨンキャップを被った女性がにとりに笑いかけていた。

「い、いえ……さっぱりです」

にとりは少し戸惑いながら答える。

「そうですか。ちょっとお借りしますよ」

「あ!」

桃色の髪の女性は包帯の巻かれた右腕でにとりの持っていた釣竿を手に取ると、糸をたぐりよせた。

「ふむ、蜘蛛の糸とは珍しいものを使うんですね。おや、これは……」

針ごと喰い干切られてしまったのだろうか、糸の先に付けたはず

の釣り針は忽然と姿を消していた。これではいくら糸が強かろうが形無しである。

「ええと、これは、その……」

にとりは途端に恥ずかしくなって口ごもる。

「素晴らしい！」

「へ？」

しばらくの沈黙を破ったのは女性の驚嘆の声だった。

「古の太公望呂尚様に倣って釣糸を垂らして瞑想をしていたとは……いやはや失礼しました」

「いや、私はただ釣りを……」

「謙遜しなくとも結構ですよ。私にはちゃんとかわかっていきますから」

女性はぼんぼん、にとりの肩を叩く。いけない、この人は話し出したら止まらないタイプだとにとりは直感した。

「いやはや人間の数倍長く生きてきた私ですが、まさか間欠泉の温泉への転用を止めに来ただけなのに……旧知の友に会えて、さらに久しぶりに同じ仙人を志す方に出逢えるとは……これほど素晴らしいこと日はそうそうありません」

彼女は感慨深そうに腕を組んでうんうんと頷く。

「同じ仙人って……あなたまさか！」

「あら、自己紹介がまだでしたね。私は茨華仙と申す行者……まあ、仙人と呼んだ方がわかりやすいですね」

自らを茨華仙と呼んだ女性は胸に挿した牡丹の花に手を当てながら答えた。

「あ……」

にとりは思い出した。彼女は確か博麗神社で常温核融合の実験をやったときに八坂様や巫女たちと地獄の間欠泉がどうのこうのと話していた人だと。

「そっか、あんたが……」

にとりの中にぶつぶつと怒りが込み上げてくる。そうだ、こいつ

のせいで楽しみだった温泉に入れなくなつたんじゃないか。一目会つたら思いつきり文句を言つんだつた。うつぶんもたまつてるとこだし、全部ぶつけてやろう！

「あんたが余計なことを」

「おおそうでした」

「はい？」

「余計なお世話かとは思いますが、先達として言っておきます」

華仙はにとりの手を握って彼女の目を凝視する。

「え、あ、あの……」

「仙人への道は厳しいです。桃の木の植え方や、炊事や洗濯、薪割りなど、本当に修行なのか？ と、思つてしまうこともあるでしょう」

「は、はあ……」

にとりは穏やかながら堂々と語る華仙に口を挟めないでいる。

「しかし、へこたれてはいけませんよ。たとえ友人に『そんなのは修行なんかじゃない、使用人のやることだ。お前は騙されてるのさ』などと嘲られることがあつても、妻に愛想を尽かされても……おつと、話し込んでしまいましたね。失礼しました。では私はこれで。貴女が立派な仙人になれることを願つていますよ」

華仙は言いたいことをひとしきり言い終えると、地上へ続く方へ歩いていく。

「ああ、それと」

華仙は何か思い出したように振り返る。

「もしそれでもくじけてしまうようなことがあつたら、私の家に来なさい。私とペットたちがみっちり修行させてあげますから」

「はあ……離れりめんどくさい人だつた……」

再び一人橋の上に残されたにとりは深いため息をつく。彼女の頭の中には仙人イコールめんどくさい人という方程式が出来上がつて

いた。

「あ、酒場で椀と飲むんだった……」

にとりはふらふらと街の喧騒の中へと入っていく。お酒くらいは気兼ねなく飲めるだろうという希望を抱いて。

「へいらっしやい！」

「にとりー、こっちこっち」

酒場は外よりも騒がしかった。

「何にしましょう？」

「えーっと……ビールと、あと漬物」

「何の漬物で？」

「あー、……ナスとキュウリで」

「へい。そちらさんは？」

「日本酒『大江山』と、手羽先とトンカツ」

「合点承知！」

にとりは途切れ途切れになりながら、椀は物おじせずにはつきりと注文した。

「肉ばっかりなんて、がつつりいくねえ椀」

「ただぶらぶらしてただけだったけど疲れちゃったからね。どこもかしこも騒がしくってさあ、落ち着けないのなんの」

「あー、わかるかも。そうだ！ 聞いてよ椀、私仙人さんに会っちゃってさあ……」

にとりは堰を切ったように話し出す。会ったときの雰囲気やら、文句を言おうとしたらいきなり長話をされたことやらをにとりの主観たっぷりに話した。

「仙人ねえ……それだけ聞くとおしゃべり好きなお姉さん、って感じもするね……」

「そうそう！ 仙人さんってもっと頭が長かったり、白い髭を生や

してそんなイメージだったんだけどなあ」

「それは偏見だよ……」

椀は手羽先を、にとりは漬物をかじりながら話す。どちらも味が濃く、酒によく合った。

「そうかな？ あ、それとね、鬼の四天王の勇儀さんにも会えたんだよ。それでね……」

にとりはさらに話し出す。椀はそれを楽しそうに聞いていた。

「……でさ、勇儀さんがグイーツって竿を引くとさ……でっかい水しぶきをバツシャーン！ ってたててさ……見たこともないくらいでっかい魚がさ、グワーツ！ って口を開けてこっちに迫ってくるわけ。それを勇儀さんが拳でドグシャアツ！ って殴って倒したのかっこいいでしょ？」

「……その勇儀さんの一本釣りの話、もう七回は聞いたよ……」
べろべろに酔っ払ったにとりの話にうんざりした椀はちびちびと酒を啜りながら言う。座敷にはにとりが飲み干した空のビール瓶が数本置かれていた。

「ふえ？ そうだっけ？ ……むぐう……」
にとりはぐつたりと空の皿に突っ伏する。かすかに寝息も聞こえ始める。

「にとり？ ……寝ちゃったか。しゃべるだけしゃべって、まったくないご身分だねえ……。すいません、お勘定」

「へい」

椀は伝票に記された酒の安さに驚いた。さすがは街じゅうが宴会会場と呼ばれるだけのことはある。

「よっ」

椀は酔いつぶれたにとりをおぶって居酒屋を出る。まだまだ宵の口といったところだろうか、旧都のどんちゃん騒ぎは済みそうになり。

「いづも賑やかだと、逆にちょっといびつらくなっちゃいなあ……」
桜は喧騒にかき消されるほど小さくつぶやいた。

旧都（後書き）

台風が近づいていて風が強いですね。（9月3日現在）
さかまたです。

今回は茨華仙さんに登場していただきましたが……ただの他人の話
を聞かないキャラになってしまいましたね……。
それと勇儀とパルスイは短編を別所で書いてからまた書きたいなあ、
と書いていたキャラでしたのでなかなか楽しく書けました。

秋めく山

気がつくにとりは地上へと繋がる大穴を、蜘蛛の糸を伝って登っていた。酔いが残っているせいか頭が痛い。ふと頭上を見ると出口からかすかに差し込む光が目染みだ。

登りきるにはあとどれだけかかるだろうか。半分以上は登ってきたと思っていたが、一向に出口に近づいた気がしない。

にとりはふう、と糸を手繰るのを止め一息つく。片手についている土の壁がひんやりとして心地よい。

「あらあら、こんなところで蜘蛛の糸にぶら下がって、何がしたいのかしらん？」

しばらく休んでいたにとりが驚いて顔を上げると、雛がにとりを見ていた。表情は良く見えなかったが、どこことなく背筋が凍るような、不気味な雰囲気が出た。

にとりは恐る恐る厄集めはしなくていいのか、と訊こうとしたが、どうしたことが声が出ない。いよいよ気味が悪くなってきた。片手をつけている土のひんやりとした感触すら気持ち悪く感じてくる。

「でも蜘蛛の糸なんかでこの大穴を登りきろうなんて、にとりも命知らずねえ」

雛が糸を指でなぞり、はじく。

やめて、にとりは叫ぶ。が、声は出ない。心臓を直に握られているような感覚。蜘蛛の糸がそう簡単に切れないことはわかっていて、それでも、雛が糸を揺らす度に恐怖を感じる。

「やめろって言うてるのがわかんないの！？ その手を放せっつてんだよっ！」

自分でも驚くほどの大声でにとりは叫んだ。すると突然糸がぷつり、と音をたてて切れ、ぐらりと体制が崩れる。

背中に寒い感覚が広がり、全身からさっと血の気が引いたあと、

嫌な浮遊感がにとりを支配した。

「うわぁッ！」

びくん、と痙攣したように体が跳ねた。にとりは息を切らしながらゆっくりと首を左右に動かし、周りを見回す。まだ背中には嫌な寒気が残っている。

一人で暮らすには少し広い空間を無駄に、窮屈に、そして雑然と並べられた雑貨や発明品、なるほど確かに自分の部屋だ。

「……夢か」

ほつと胸を撫で下ろす。本当にあの高さから頭から落ちたら、嫌でも地獄にずっと住むことになったんだろうな、そんなことを思うにとりは笑った。

少し緊張がほぐれ、急に視界が広がった気がした。にとりは窓の外を見る。

空は青く晴れ渡っていた。木々の鮮やかな緑と所々に見え始めた薄紅葉がまぶしい。紅葉の秋、と呼ぶには程遠いが、秋を感じさせるには十分だ。

「静かだなあ……」

静けさの中、にとりは一人呟いた。地底にいた時は騒がしいと感じたが、帰ってきた今となってはその喧騒すら懐かしく思えてくる。結局あのはは二日酔いで寝込んでたなあ、などとしばらく地底での出来事を思い起こしていたにとりだったが、ずっと感傷に浸っていてもなあ、と思い普段着に着替え、出来合いの物で食事を済ませると、行くあてもなく外に出ることにした。家を出た途端、涼しげな秋風がにとりを包む。

さて、今日は何をして過ごすのか。

鍵山雛は風に髪を、裾をなびかせながら楽しそうに踊っていた。足下で無数に咲くコスモスもまた風に揺られ、踊る。

山中に密やかに存在するこの花畑は、季節ごとに色を変える。春は菜の花が黄色に、夏は雛げしが紅色に、秋はコスモスが青紫に、そして草木が眠る冬は雪が真っ白に、それぞれ鮮やかに彩る。雛はそんな四季折々の変化を見せるこの場所が好きだった。

「あら雛、ごきげんよう」

「秋はいいものでしょう?」

声に気づいた雛は踊りを止め空を見上げると、彼女と同じく神である秋静葉と秋穰子が寄り添うように飛んでいた。二人はたわわに稔った麦の穂のように輝く揃いの金色の髪を揺らし、雛に笑いかける。

「あら、静葉に穰子じゃない。ごきげんよう。最近めつきり山が秋めいてきたけれど、あなた達の仕業かしら?」

雛も笑い返す。彼女たちは秋以外はあまり外を出歩かないため、雛がこうして会うのも久しぶりだ。

「そうね、確かに私は滝の周りを秋めかせてきたわ。これがほんとのフォールオブフォール、ってやつね!」

静葉が「決まった!」という顔をする。花畑を秋とは思えないほど肌寒い風が吹き抜け、微かにコスモスが揺れた。

「……静葉、どうしたの? いきなりドヤ顔しちゃって」

「焼き芋の食べすぎかしら?」

暫しの硬直の後、雛と穰子は揃って首を傾げた。

「……好き勝手言ってくれるじゃない。私が渾身のギャグをかましたっていうのに。あと穰子、焼き芋の食べすぎなのはあந்தよ、あ

んた」

そのまま静葉はふて腐れた顔をしながら地に足をつける。するとふっと風が吹き、静葉の足下の紅葉が舞った。

「ギャグ？ どこが？」

「どこかしらね、雛さん」

雛と穰子は再び揃って首を傾げる。

「……あなたたち、まさかやった本人にギャグの説明させるの？」

「そうよ。何か問題でもあるの？」

「だって姉さん、わからないもの」

怪訝そうに静葉が二人の顔を覗き込むようにしてきくと、すぐに答えが返ってきた。

「あんたらねえ……自分で自分のギャグを説明する虚しさがわからないの？」

「全然。あなたが冬を毛嫌いする気持ちくらいわからないわ」

「姉さん、私もよ」

「またも即答。」

「ぬう……天然コンビめ……あんたらは喋ってるだけでもギャグになるっての。いいわ、教えてあげる」

静葉はだるそうにどっかりと腰を下ろすと、つられて雛と穰子もゆっくりと腰を下ろす。

「いい？ まず秋は英語で『fall』よね」

「せんせー、秋は『おーたむ』じゃないんですかー？」

穰子が手を上げてきく。

「そうともいう。で、滝のことも『fall』っていつの」

「……それで？」

静葉が穰子の質問を軽くいなすと、今度は雛が寝そべって頬杖を突きながらきく。

「それでって……『fall』がダブルミーニングになってるでしょ？ それがオチ」

「わかりづらいし、そこまで面白くもないわね。それに、それを言

うならダブル『ミーニング』じゃないかしら？」

「ぐはあっ！」

雛の齒に衣着せぬ言葉に静葉は仰向けに倒れ込む。

「姉さん気をたしかに！」

穰子は駆け寄って静葉を抱き起こすと、芝居掛かった口調で言った。

「くっ、やっと我が世の春が来たってのにこの厄神ときたら……」

静葉は呪うように呟く。

「落ち着いて姉さん、今は秋よ」

「穰子。そりや比喻よ、比喻………もう、なんか思いつきり疲れたわ。穰子、人里に行つてちやほやしてもらいましょ」

静葉は穰子の手を借りて起き上がる。

「それはいい考えね。……それじゃ雛さん、そういうわけだから「きげんよう」」

「ええ、さようなら」

雛は飛び去っていく二人に手を振った。空には紅葉の赤が舞っていた。

犬走椛は哨戒の仕事のかたわら、空から衣替えを始めた妖怪の山を眺めていた。麓にはまだ緑が残っているが、山の頂に近付くにつれ紅葉が目立ちはじめ、中腹の辺りなどもう秋の盛りと言っても過言ないほど鮮やかだ。秋の神がおわすのはあの辺りなのだろうか、と椛は思った。哨戒の仕事は千里先を見渡す程度の能力の持ち主である彼女に重点的に割り当てられる。天狗の縄張りに近づく者を素早く発見し、排除する。広い視界を持つ彼女にはうってつけの仕事だ。

とはいってもそのように危害を与えようとする妖怪も人間も今は滅多に現れない。そのため椀はよくぼんやりと山を眺めていることが多い。

椀は軽く伸びをすると、休憩のために一度山に降りることにした。休むのにちょうどいい太さの枝にとまり腰かけると、椀は弁当箱代わりの笹の葉の包みを解いた。今日の昼食は握り飯が二つだった。腹持ちは良いが、物足りない。

「……干し肉でも持って来ればよかったな」

椀は握り飯を頬張りながらも周りを警戒している。

「……む」

椀の耳が微かに動き、穏やかそうな目つきが鋭く変わる。縄張りに近づく者を発見したのだ。

椀は腰に提げた反り身の刀を抜き、こほん、と一つ咳払いをした後、侵入者の近くの枝に飛び移る。一本歯の高下駄で細い枝に立つ、こつした人間には到底できない「天狗らしさ」を出すのも哨戒天狗には肝要だ。

「おい、その人間。ここから先は天狗の縄張りだ。早々に立ち去ってもらおうか」

椀はどすの効いた声で侵入者に声をかけた。木々が怯えたようにざわめく。ぱつと見たところ武器になりそうな物は持っていない。こんな山奥まで来て丸腰では、殺されても文句は言えまい。椀は刀を納め、はあと呆れたようにため息を一つついた。

「さあ、帰った帰った。どうせ道に迷ってこんな山奥まで来たんだろっ?」

「いえ、九天の滝を眺めに来たんです」

椀は表情には出さなかったが、ひどく面食らった。柔和そうな雰囲気をしてるくせに命知らずな奴だ。いや無鉄砲と言った方がいいか。椀は思った。

「あの、もう行って宜しいでしょうか?」

「ああ、行っていいぞ。ただし、帰りは川づたいに帰れよ。天狗の

手を煩わせるな」

我々はお前のように暇ではないのだから、と言つのが早いか椀は八艘飛びもかくや、というように木々の枝から枝へと飛び移つてその場から去つていった。

あの能天気な雰囲気は機械好きな親友に似ていたな、と椀は樹に寄りかかつて二度目の昼食を採りながら思った。

「あ」

なるほど、あれがにとりの言つていた盟友か。合点のいったように椀はぽん、と膝を叩いた。

にとりは川で水切りをして遊んでいた。手を離れた石が十数回水面を跳ね、沈む。手首のスナップを利かせて石を投げ水面を跳ねた回数を競う、これだけの遊びなのにどうしてこつも奥が深いのか。もし石を水切りに最適な重さ、形状に極限まで加工して、力学的に完璧なフォームで投げたらどれだけ跳ねるのだろうか、想像しただけでにとりは楽しくなってくる。

「よし、今日は水切りに最適な投げ方を研究……おや？」にとりが張り切っていると、陽の光を反射して輝く川の上流から、鮮やかに紅く色づいた紅葉が数枚さらさらと流れてきた。「綺麗な紅葉……山の奥はもう秋真っ盛りなのかな？」

にとりは川に入って紅葉を拾い上げると、周りの木々を見る。葉の先が微かに色づいていたり、まだ青かったりとまちまちであり、ここも紅葉の秋には程遠い。

水切りの件はまた今度考えることにしたにとりは川岸を紅葉が流れてきた方向へ歩き始めた。

「紅葉がたくさん落ちてたら集めて焼き芋でもしようかなー」

にとりにとっての秋は、食欲の秋だった。

彼は森の中を歩いていった。踏むとサクサクと音をたてる落ち葉が秋を感じさせるが、木々の間から見える空は真夏のように高い。

山全体が燃え上がるような紅葉で色めくようになるのはいつだろうか、地獄に遊びに行つてくると言つてからしばらく会つていない親友は元気だろうか、などと考えながら、彼は山の奥へ奥へと足を進めていった。

彼にとっての秋は、紅葉の秋。

秋めく山（後書き）

ずいぶんと更新が滞ってしまいましたね。すいませんでした。
書き始めた頃は秋の初めだったんですが、もう中ごろにまでなっ
てしまいました。

余談ですが、今年の秋は寒いですね。毎年言っているような気もし
ますが……

秋めく滝

うつそうと生い茂る森を音のする方へ進んでいくと、大きな滝へ辿り着いた。周りの木々は鮮やかに紅葉で彩られ、水面には無数の紅葉が浮かんでいる。その光景から、この場所が秋に愛されているようにも感じられた。

彼は水際の休むのに丁度いい大きさの岩に腰かけ、履物を脱いだ足を投げ出した。彼はかばんから取り出した乾パンをかじりながら、勢いよく流れ落ちる水の音に耳を澄ませる。幼い頃訪れたときと変わらない風景と滝の音。

「まだかな、まだかなー。焼き芋まだかなー」

にとりは手に持った紅葉をくるくると回しながら、川沿いを上流へ上流へと歩いていった。そのままずんずんと進んでいくと、紅葉で飾られた滝が現れた。そして、その傍に彼女にとっては見慣れた人影が一つ。

「めいゆ……」

口を開きかけて、止めた。どうせ声をかけるならこっさり近づいてびっくりさせてやろう、と思ったからだ。早速にとりはリュックから光学迷彩を取り出して姿を隠すと、足音を立てないように用心しながら滝の方へ近づいていった。

「兎追いし、彼の山。小鮒釣りし、彼の川……」

彼は懐かしい歌を口ずさむ。兎は追いかけてなかつたが、川釣りは祖父に連れられて行ったものだ。彼は視線を落とす。水に浮かぶ紅葉が、いつもよりまぶしく見えた。

「げげ、人間!？」

物思いに沈んでいた彼が驚いて顔を上げると、青い髪を左右で束ね、水色のスモックのような服を着た少女が大岩の上に立っていた。

「……なーんちゃって。久しぶりだね、盟友」

「ああ、久しぶりだね、にとり。……いつからそこにいたんだい？」

盟友は立ち上がって言った。

「いつからって？ 盟友が歌を口ずさむちよつと前からだよ。やっぱり私の光学迷彩はすごいね！ 盟友全然気づかないんだもん」

自慢気にとりは胸を張る。

「恥ずかしいところを見られちゃったな……」

盟友は少しにとりから目を逸らして頭をかく。

「ちよつとちよつと、そこは私の光学迷彩を褒めるところだよ？」

「そうだったの？」

「そうだよー。そうそう……この近くからは天狗様の縄張りだから、人間があんまり近づいたら危ないよ？ もし天狗様の機嫌が悪かったら、その場でスパツ！ と斬られちゃうかも」

にとりは軽く辺りを見回してから声を殺して言う。実際は人間を斬り捨てると報告書を山のように書かなければならないので、余程人間が出過ぎた真似をしない限り斬り捨てはしない、と椀は言っていたが、一応脅かす為にとりは言ってみたのだ。

「……それは嫌だな、これからは気をつけるよ」

今までは運が良かったただけだったのだと思うと盟友は背筋が寒くなつた。

「うむ、よい心がけだよ。そういえば盟友はどうしてこんな山奥まで来たの？」

にとりは大岩から飛び降り、軽く砂を払いながらきいた。

「小さい頃にここに来てたのをちよつと思ひ出してね、久しぶりに行ってみようと思っただ。にとりは？」

「私？ 私は川で遊んでたら紅葉が流れてきてね、山奥には落ち葉がたくさんあるんだろうと思っただから、焼き芋しに来たってわけ」

「なるほどね。にとりらしいや。肝心のお芋は？」

「バツチリかばんの中に入ってるよ」

にとりは後ろを向いて背負っているリュックサックを盟友に見せつける。リュックはどうすればそんなに詰め込められるのかと言いたくなるほど膨れ上がっていた。

「さて、そういうわけだから盟友、落ち葉集めしようか。盟友はあつちから集めてきてね、それじゃ！」

盟友が口を挟もうとしたときにはにとりは既にせつせと落ち葉を集め始めていたので、盟友は肩をすくめると言われた通りに落ち葉を集めることにした。

ぱちぱちと焚き火に使った落ち葉や枝に残っていた水分が弾ける音の合間に、ぱちん、ぱちんと駒を置く音が響く。

「そう来るか。じゃあこつちに逃がして……」

「はい、残念。そこは桂馬が効いてるから行けないんだなー、これが」

「……詰みだね」

「そういうこと。これで四連勝だね！ じゃ、また焼き芋はもらってくよ。いやあ賭け将棋もなかなか面白いですなあ、盟友！」

にとりは木の枝で焚き火をつついて焼き芋を取り出す。

「まあそれだけ勝ってれば気分良いよね……」

盟友は新聞紙の上に置かれたさつまいもを一つ取って火にくべる。賭け将棋を始めてからというものの、盟友は専ら焼き芋を作る係になつていた。

「あ、盟友、半分食べる？ 頑張つて私に勝つつもりなら余計なお世話だけど」

さすがに盟友が少し可哀想だと思つたにとりが焼き芋を半分に分けて盟友に差し出す。盟友はちらりと残りのさつまいもの数を数える。残りは五個足らずだった。

「……僕じゃ芋がなくなるまでにとりには勝てないだろうし、お言葉に甘えることにするよ」

そう言つと盟友は差し出された焼き芋を受け取り、口に運ぶ。ほくほくとしたさつまいもの甘さが口に広がった。自然と顔が綻んでくる。

「うん、おいしい。眺めもいいし」

「だよ。良い眺めの場所で食べるといつもより美味しくなるよね。……どうしてかな？」

「本当ににとりはどうして？ って考えるのが好きだね」

「だって、わからないことがあるのにそのままだったらもやもやしちゃうでしょ？」

「そうだけど……知らない方がいいことだつて、世の中にはあると思つよ」

「そんなことつてあるのかな？ 私は盟友より長く生きてるけど、今まで知らない方がよかつたなんて思つたことなんて一度もないよ？」

盟友が少し俯いて言つと、にとりは笑つて答える。その純粹さを盟友は羨ましく思った。

「僕より長生き、か。見た目とか言動からはそんなふうにはとても見えないけどね」

「失礼な！ よーし、今度は更にこてんぱんにやつつけてあげるから覚悟しなよ盟友ー！」

「ならこつちは焼き芋が出来上がるまで勝負になるように頑張ってみようかな」

二人は盤上に散らばった駒を並べ始めた。

「そういえば盟友、盟友が一番知らない方が良かったな、って思ってることって何？」

「そうだね……寺子屋をやってる慧音さんが満月の夜に角が生えることかな」

「あゝ、あれは怖い。キモい。さすがの私も初めて見たときはびっくりしたよ、うん」

にとりは駒を一マス進めた後、大きく頷いた。

守矢神社の二柱

守矢神社への道をずんずんととりは進んでいた。

山は晩秋に入ってようやく衣替えを終えたらしく、色とりどりの紅葉が眩しい。空は夏のように高く青く澄んでいた。だがしばしば通り過ぎる風は肌を刺すように冷たく、まるで冬のよう。

この中途半端さも秋の醍醐味さ、にとりは体を少し縮こませながらふふん、と寒さで少し赤くなった鼻を鳴らしてみせた。

山頂に近づき、嫌でも目立つ御柱が木々の間から見え始めると、にわかには辺りが暖かく感じだした。もう宴会は始まっているらしい。心なしか歩みが速まる。首から負い紐で提げられたカメラが大きく揺れた。

神社は既に山に住む神々や妖怪達で賑わっていた。紅白の巫女の神社など比べ物にならない程だ。

「あ、文さん！」

にとりは手帖を片手に談笑していた射命丸文に大きく手を振りながらが駆け寄る。

「こんにちは、にとりさん。今日は絶好のお祭り日和ですね。……」

ここに来るまではちょっと寒かったですけど

「ほんと、今日はいい天気ですよね。でも、こっつも冷えるともう冬みたいで……」

「しっ」

文がにとりの口に人差し指を当てる。

「壁に耳あり障子に目あり、ですよ。もし秋の神様に聞かれたらど

「つするんですか」

「う、ごめんなさい」

にとりははつとしてすぐに文に頭を下げる。

「……まあ、もう聞かれちゃってみたいですけど」

文がにとりの口から指を離してさした方向には苦笑いを浮かべる
秋静葉と穰子がいた。

「あ、どうも……」

にとりは軽く二人に会釈するのが早いか文に手を引かれてそそく
さとその場を離れた。

「そついえば、今日はどういう風の吹き回しですか？にとりさん。
私の取材を手伝いたいだなんて」

ま、ちようどいいタイミングでしたけど、と文は言った。

昨日、文は明日に晩秋の祭が守矢神社で催されるので取材に行く
から手伝って欲しいと椋に言ったところ、同僚にまた休むのかと白
い目で見られるのは耐えられないと断られた為、にとりの頼みは渡
りに船だったのだ。

「いやあ、ちよつとこのカメラを使ってみたくなつたんですよ」

にとりは首から上げたカメラを指さす。銀と黒のツートーンの曲
線的な文のカメラとは対称的な、黒一色の角ばった形状がどこかレ
トロな雰囲気を漂わせる。レンズ横には測距計らしきもの。むう、
と文はうなつた。

「なかなか良さげなカメラですけど、前に測距計があるんじゃないやあ使
い物にならないんじゃない？」

「と、思うでしよっ？」

にとりがにやりと笑う。

「あや、ということは何か仕掛けがあるのですね？」

文はにとりのカメラをじろじろと見ながら言った。

「そうなんです！ なんとこのカメラ、自分で距離を測って勝手にピントを合わせてくれるんですよ！」

にとりが胸を張る。なるほどね、と文は呟いてカメラを手に持つ。彼女が普段持ち歩いているものより重たい。にとりは気にせずカメラの説明を始めた。

「自動でピントが合う仕組みはですね……この前面のセンサーが被写体との距離を」

「つまりこれは魔法のカメラ、そういうことでしょうか？」

「ま、まあ乱暴に言ってしまうえばそうですね……」

急に話を遮られ、しどろもどろになりながらにとりが答える。

「なら今日はあなたにカメラマンを頼んでも安心ですね。どこぞの庭師みたく言うなら、『撮ればわかる』ってやつでしょうかね」

「え、えっと、あの、私説明を……」

にとりの慌てぶりに文はくすつ、と笑う。

「さて、それじゃ取材開始といきますか！ 何か質問は？」

「あ、ありません！」

にとりは気をつけの姿勢で言うと、また文は少し笑った。

「じゃ、行きましようか」

「はい……」

少し肩を落として、にとりは文の後をついていった。

「どうも〜清く正しい『文々。新聞』です」

最初に文が声を掛けたのはあろうことか難だった。笑われるので

はないかと思つたにとりは、普通より気持ち離から距離を置いてカメラを手にかけた。

「あらあら、天狗の新聞屋さんじゃない。私にはあなたが食いつくようなネタは無いと思うのだけど？ ……まさか私に頼らないといけないくらいネタに困つてるとか？」

文は苦笑い。

「ハハハ……離さんはどうしてこのお祭りに？」

「お祭りといつたらお酒でしょ？ あと踊り。秋もそろそろ終わるし……あらにとり、カメラなんか持って新聞屋に転職？ なかなか似合つてるわよ」

「そう？」

にとりは照れくさそうに頭をかく。

「ほら、照れてないで撮らなきゃ」

「あつ、はい」

にとりはカメラを構え、ファインダーを覗き離を中心に収め、シャッターを切る。このカメラのオートフォーカスでピントが合うのは中心だけであり、測距計を見て被写体との距離が正しいか確認するまではピントが本当に合ったかはわからない。そのためにとりは念には念を入れてもう一枚同じ構図の写真を撮る。

「じゃあ話を続けますね。離さんはこの秋は……」

フィルムを巻いて、シャッターを切つて、距離計を確認して、またフィルムを巻く。次第に文の声が遠くなる。文が写真に熱心になる理由がにとりはなんとなくわかつた気がした。

酒を飲み交わしている集団に一通り取材という名の雑談を終え、陽も傾いてきた。

「さーて、にとりさん。次はいよいよ本丸ですよ」

「えっと、どういう意味ですか？」

カメラのフィルムを交換しながらにとりが訊く。かれこれフィルムはこれで三個目だ。

「決まってるじゃないですか！ 守矢の二柱の方にインタビューしに行くんですよ。……ほら、にとりさん、シャッターチャンスですよ。夕焼けの中佇む神様、いい画になります」

文は物思いに耽りながら大きな赤漆塗りの杯を傾ける八坂神奈子を指さす。

「あ、もちろん自然な姿を撮ってくださいよ」

「え？ それって無理じゃないですか？ このカメラズームできないし……」

「やだなあにとりさん、わかって言ってるでしょ？ 相手に見つからずにギリギリまで近づける道具、持ってますよね？」

文が肘でにとりを軽く小突く。

「ああ、あれですね。もちろん持ってますよ」

にとりはぼん、と手を打ち、リュックから光学迷彩を取り出して身につける。

「じゃ、行つてきます」

「私も傾合いを見計らって行きますからね」

にとりが軽く敬礼すると、文も同じように返礼した。

八坂神奈子は楽しそうな喧騒を聞きながら杯を傾けた。元いた世界と比べれば、これだけの規模の宴会を開けただけでも素晴らしいことだと神奈子は思った。多くの信仰が集まり、何より早苗が楽しそうに笑ってくれる。幻想郷に来てよかった、こんな時に強く感じ

る。

カシャツ

「ん？」

音のした方へ神奈子は振り向くが、人影は見えない。

「どうも八坂様、清く正しい『文々。新聞』です」

振り向いた隙を見て文が近づいて挨拶する。

「ああ、天狗かい。さっきのシャツター音もあんたの仕業かい？」

神奈子は少し苦笑しながら文に訊いた。

「違いますよ」

「なら誰なんだい？」

「私の優秀な助手の仕業です」

にとりが照れくさそうに文の隣に現れる。

「ほお……あれが噂の光学迷彩か、天狗の隠れ蓑みたいだな。面白い、いい助手だ」

「今日限定なのが残念なところです」

「それはよかった。こんな神出鬼没な奴があんたについてちゃ、いつでもどんな写真を撮られるかわからないからね」

神奈子は冗談っぽくすすくと笑った。にとりはカメラを構え、シヤッターを切る。

「しまった、そうでしたね……惜しいことです。……さて、本題に入りましょうか」

文は手帖を開き、耳にのせていたペンをとる。

「ん、何かな？」

「今回の宴会……もとい祭は誰が考えたのですか？」

「考えたのは早苗だね。『これで更に信仰が増やしましょう！』って張り切ってたよ。ほとんど一人で準備したんだ、早苗はいい子だよ」

神奈子は微笑むとまた杯を傾けた。にとりにはそれがわが子の成長を喜ぶ母親のもののように見えた。

「なるほど……誰かと似てますね」

八坂様に、と心の中で呟き、文もペンを走らせながら微笑んだ。

「ああ、諏訪子そっくりだ。二人ともこんな私を支えてくれる。感謝してもしきれないよ……」

神奈子は目元を拭った。

「おっと、今のは二人には内緒だよ？ よそよそしくされたらかなわない」

「もちろんです。神様に恨まれたらかありませんから」

文は書き留めていた手帖のページを取って破り捨てた。

「助かるよ」

神奈子は礼を言うと、立ち上がって伸びをする。

「どこへいくんですか？」

にとりが訊く。

「何処つて、決まってるじゃないか。あの賑やかな輪の中に混ぜてくるのさ。だって神様は、どんちゃん騒ぎが大好きなお調子者なんだから！」

「なんだか家族みたいに仲が良いんですね、皆さん」

賽銭箱の前に座り込んだにとりが言う。

「そうですね……」

未だ境内で踊っている人々を見、太鼓と笛の祭囃子に耳を傾けながら文が言った。

「……まだみんな踊ってるのか。飽きないなあ早苗も神奈子も。あ、いらっしやい」

奥から眠そうな目をした洩矢諏訪子が現れる。ふと思いついてにとりは立ち上がって諏訪子に声を掛ける。

「あの、洩矢様」

「ん？」

「いつもありがとう、って言いたい人っていますか？」

諏訪子は少し考え、

「そうだね……やっぱり早苗と神奈子かな。二人とも私がダラダラしてるのに頑張ってくれてるし……あ、二人には内緒にね」

とはつきり言った。

にとりと文は顔を見合わせると、笑った。

写真機

晩秋というよりむしろ初冬と言いたくなる寒さになった。外は空
つ風がひゅうひゅうと音をたてて吹いているが、にとりの部屋は微
かな電気スタンドの作動音と、新聞を繰る音以外はいたつて静かだ
った。

「どうかな？ 盟友、うまく撮れてるかな？」

電気スタンドのついた作業台に置かれたカメラを分解しながらに
とりが盟友に訊く。対して盟友は彼女に手渡された一昨日の新聞を
読んでいる。守矢神社での祭を報じたそれは、普段よりも写真の比
率が高く、『発行者、射命丸文』の隣に『撮影、河城にとり』とい
う文字が加えられていた。

「上手に撮れてると思うよ。お世辞抜きで」

そう言つて盟友は新聞を置き、マグカップに入った緑茶を飲み干
した。全身に暖かさが広がる。

「ほんと？ よかったあ……」

にとりがほつとした表情を見せる。だがその手は忙しくカメラ
の基板をいじっていた。

「そつえば、そのカメラどうしたの？」

盟友が基板を覗き込みながら言う。基板には所狭しと銅箔で回路
が書き込まれており、端からは色とりどりのコードが延びている。

「これ？ 川底に沈んでたのを拾つたんだ。もつたないことする
奴もいるんだねえ、盟友。まあ私は得したけど」

にとりは作業の手を止め、盟友に向けてふふんと自慢気に鼻を鳴
らした。

「運が良かったんだね」

「ふっ……日頃の行いが良いからだね」

盟友はその自信は何処から来るのか、と苦笑い。

「それでね、このカメラはね、なんと自動でピントを合わせてくれ

るんだ！」

「へえ……初めて見るよ」

「でしょでしょ？」

にとりは嬉しそうに笑う。

「ちよつとそのカメラ、触らせてくれるかな？」と盟友。

「もちろん！ あ、ちよつと待つてね」

にとりは基板をカメラに入れ、それから丁寧に、かつ素早く、慣れた手つきでカメラを組み上げると、盟友にぼんと手渡した。

「ありがとう」

「どういたしまして」

盟友がにとりに笑顔で礼を言うと、にとりも笑顔で返した。

「あ、盟友なら心配いらないけど、一応丁寧に扱ってね。こいつのレストアには結構高かったんだから」

「高くついたって、どういうこと？」

盟友はカメラに視線を落とし、首を傾げる。

これまでにとりは大抵の部品を有り合わせや拾い物で賄っていた。使わなくなった圧力鍋と拾ってきた鉄パイプで川から水道を引いてきたときは盟友は感心したもので、そんな彼女の発言に違和感を感じたのだ。

「河童の友達に手伝ってもらったんだけど、ちよつとしたアクセシビリティで一人永遠亭送りになっちゃってね」

にとりは“まあこういうことも発明家には付き物さ”と付け加える。と何でもないかのように笑った。

にとりによると、友達が来た途端に宴会ムードになり、テンションと酔いが最高潮のまま作業に取り掛かったところ一人がビニールを巻いていないピンセットで配線をいじって感電したという。

「いやあ竜宮の使いの電撃もかくや、ってくらいシビれてたね！」

「……災難だったね」

盟友は嬉々として語るにとりに少し呆れながら言った。

「うん。永遠亭で薬師さんにも『私はあくまで薬屋で医者じゃない

ですから』って怒られちゃった。これでまた教訓が一つ増えたよ」
「なんだい？」

「『ぬるいビールは悪酔いするから友達には出さない！』って」
にとりはスカートのポケットから紙とペンを取り出し、勢いよく書き始めた。にとりの字は草書体と呼ぶのも苦しいものだった。

「……酒飲んで作業しないってのも追加しようか」

「おお、冴えてるね盟友！ 追加追加」

にとりは上機嫌にペンを走らせる。紙の上で踊る黒いみみみずが増える。

「はい完成！ じゃ、カメラの話に戻ろうか」

にとりはペンを一回転させるとそのままカメラのレンズを指した。
「シャッター速度は1/60、1/125、1/250の3速式。」

カメラが周りの明るさに応じて自動で選んでくれるから、私や盟友みたいな素人でもそれなりに様になるのが利点だね」

「でもそれって日常的にカメラを触ってる人には要らない機能じゃないかな？」

シャッター速度が自動で決定されるということは、露出の調整ができないということであり、それは文のように弾幕写真を撮影する場合に問題となってしまう。弾幕が放つ光によってカメラが明所と判断してしまい、シャッター速度が速くなる。すると、全体が暗い写真が出来上がってしまうのだ。

「まあね。多分文さんが使ってくれなかったのも今使ってるカメラへの愛着以外にその辺の問題があるんだろうなあ……」

にとりは肩を落とす。

「じゃあ新しく作るカメラは自動か手動か選べるようにすればいいんじゃないかな？」

盟友がそう提案すると、にとりはわざとらしく笑った。

「はっはっは、簡単に言ってくれるねえ盟友。そんな都合良く私がカメラを改造できると思っただのかい？」

「ごめん、そんなにうまくいかないよね……」

盟友はすまなさそうに俯く。

「それができるんだよ！ 河童の……いや、私の科学力は幻想郷一だからね！」

にとりはしたり顔で作業台の引き出しから図面を取り出して広げた。

「……お見事」

「ふふん、どんなもんだい！ あ、後で河童のみんなに配るつもりだから、ひととおりこのカメラの説明したら図面写すの手伝ってね」「勿論さ」

盟友が頷くとにとりは嬉しそうに笑った。にとりはよく発明品を作ると河童の友人にその図面を配っていた。作り上げる楽しさもみんなと共有したいから、という動機からだ。

「さて、次は……」

にとりはペンを二回転させて、レンズ横の赤い目盛りを指す。

「これが距離計。撮影した後に何処でピントが合ったかの確認用。これが合っていないイコールピントがすっぽぬけたことになる。

撮った後にしか確認できないから信頼性はいまいちだけど、改造版でもこれは直さなかった」

「どうして？」

「ピントが合えば完璧な写真が出来るし、失敗したらボケボケの写真……なかなかスリリングでしょ？」

盟友は困ったように笑って肩をすくめた。

「それにこの新聞に載った写真だって、大量の失敗写真の上に成り立ってるんだ」

にとりは新聞を拾い上げてひらひらと振る。そこには何十枚という写真が使われていたが、その倍近い失敗があると考えると盟友はぞっとした。

「まあしばらく取材はやらないけどね」

にとりは新聞を置きながら言った。

「どうして？」

「いやあ、昨日の文さんの取材にもついていったんだけどどうもペー
ースが早すぎてね」にとりさんはなによりも速さが足りません！』
って言われちゃってさ……」

にとりはやれやれ、といった表情をする。

「やっぱり私はのんびり機械いじってるのが性に合ってるみたいだ
よ」

「だろうね。忙しく動き回るにとりなんて想像できないよ」

「む……なんか馬鹿にされた感じ」

にとりは膨れっ面をして盟友に十数枚の紙を突きつける。

「じゃ、そろそろ始めようか。図面の写し」

「え？ まだそんなに説明は……」

「いいから！ 盟友の丁寧な仕事ぶりに期待するよ！」

にとりは盟友にT型定規やテンプレートを渡しながら言った。盟
友は苦笑すると完成している図面を近づけて製図を始めた。

太陽も中天から少し下り始めた頃、にとりは永遠亭の長い廊下を
歩いていた。入院中の友人の見舞いのためだった。

「二十三号室……ここだね」

にとりは扉の横に掛けられたプレートを確認すると、今までの和
の雰囲気からすると場違いな洋風の白いドアノブを回した。

「やーやーチャック、元気かい？」

「ハハハ。やあK、お見舞いご苦労。ご覧の通りすこぶる元気だよ。
君が来てくれなかったら退屈すぎてこの脳漿から知識が勝手に溢れ
出てきてしまうところだったよ」

にとりが病室に入ると、彼女がチャックと呼んだ眼鏡をかけた茶
髪の河童はベッドに横たわったまま額を指さして快活そうに笑った。

チャックが呼ぶ『K』とはにとりの仲間との間でのあだ名である。彼女ら河童は仲間の間ではあだ名を使って互いを呼びあっている。理由は至極単純『そのほうが科学者っぽいから』それだけである。「それは残念。もう少し来るのが遅かったなら私はその溢れた知識をかき集めて自分の脳みそに詰め込むことができただろうに」

「ハハハ、こやつめ」

「ははは」

二人の笑い声が壁も天井も清潔感たっぷりな白で統一された病室に反響する。にとりが少し視線を落とすと、リノリウム張りの床が反射した蛍光灯の光が目染みだした。

なるほど、確かにこんな部屋に籠っていても退屈だろう。自分ならすぐに逃げ出すくらいに、にとりは思った。

「それで、だ」

チャックがベッドから上体を起こす。運動不足のせいか腰を庇いながら。

「完成したのかい？ あれは」

「勿論さ」

にとりはリュックからカメラの図面を取り出す。

「おお！ なんと素晴らしい！ どれどれ……」

チャックはにとりから図面を受け取ると食い入るように読み始めた。

「ふう……。いやあ図面とは実に素晴らしいものだな、K。眺めているだけで脳漿にイメージが浮かび上がり、今すぐにも材料をかき集めて組み上げてしまいたい衝動に駆られる」

チャックは図面から目を放すと満足げな笑みを浮かべながら言った。

「満足してくれたようで何よりだよ、チャック。早くよくなってね」

「ああ、また共に切磋琢磨できる時が来ることを衷心より願っているよ」

にとりは軽く挨拶を交わすと病室を出た。板張りの廊下の丸窓か

ら竹林の緑が見える。どこか別の世界から戻ってきたような感覚がした。

「あ、どうも」

「お大事に」

廊下で鈴仙とすれ違い、にとりは軽く会釈する。患者と間違えられたにとりは少し膨れっ面をした。

さて、残りの図面はどうしようか。竹林を歩きながらにとりは考える。図面はまだ数部余っていた。河童の友達にはあらかた配ってしまったし、雛や椀に渡しても困った顔をされるだけだろう。

「うーむ」

夕暮れも近づき、竹林の間から漏れる陽の光は辺りを紅く照らし始めていた。秋の釣瓶落としとはよく言うし、すぐに日が暮れてしまわずだから……とにとりは立ち止まって腕を組んで考え出す。

「……そうだ！ 香霖堂に渡しに行こう！」

行き先を閃いたにとりはぱちん、と指を鳴らした。前々から貯まっていたツケを払えるし、図面も余らない。にとりには実に一石二鳥な考えだと思えた。

人里から見て魔法の森のちょうど入口付近に香霖堂は建っている。人里にありがちな木造二階建ての店舗の前には、白い丁字の模様の入った赤い円筒状のオブジェやら、橙色をした象の人形、果ては

東京まで300km』と書かれた巨大な看板といった得体の知れない物体が無造作に並べられており、外見は雑貨屋というよりもゴミ屋敷のそれに近かった。

「ごめんください」

にとりがそう言つて入口の戸を開けると、ぶら下げられた風鈴が揺れ、季節外れの納涼感を醸し出した。

「ああ、その声はにとりだね。いらっしやい」

揺り椅子に腰掛けた香霖堂の店主、森近霖之助はにとりに一瞥もくねずに本に並んだ文字を追っていた。

「貯まつてたツケを返しに来ましたよ、店主さん。新開発したカメラで」

にとりはぶつきらばつにそう言つてリュックから図面を取り出した。

「フム、そうかい。ご苦労だったね。それに比べて魔理沙は……」

霖之助は深いため息をつくと、また一つページを繰った。相変わらずにとりには一瞥もくれない。

「君の爪の垢を煎じて飲ませてやりたいよ、全く」

渾身の発明にもほとんど反応を見せない霖之助に、にとりはいよいよ気分が穏やかでなくなってきた。

「そうですね。じゃ、これでツケはチャラということぞ！」

にとりは乱暴に図面をカウンターに叩きつけ、そそくさと店を出ていった。再び店に閑古鳥が鳴き始める。霖之助はハードカバーの本を閉じ、カウンターに置かれた『カメラ』を見る。

「しまった」

霖之助は小さく呟き、簡単に値札を書くと、図面の上に文珍とともに置いた。値札には『カメラ、要相談』とだけ書かれていた。

人里

「寒いね」

龍神の石像の隣に座り込んだにとりが冷えた手を擦りながら独り言のように言った。彼女は久しぶりに人里に来ていた。この龍神の石像の点検の為だ。

「おいおいK、そんなこと言っても暖かくはならないよ」

気象記録をノートにとりながら石像の点検をしている河童が言う。背はにとりより少し低く、肩にからない程度の高さで切り揃えられた黒髪が彼女を幼く見せていた。

「そりゃそうだけどさあ……」

にとりが通りすぎていく人々を眺めながら愚痴るように呟く。人々は皆厚着をしている。こんなに寒くなるなら手袋でもしてくればよかった、にとりは後悔した。

「よし、完了」

「お疲れ様。で、今月はどうだった？」

にとりが期待に満ちた顔でノートを覗き込む。

「六割と四分だったよ。平均値を下回ってる。今月は龍神様はご機嫌斜めだったらしいね」

「あらら」

にとりは、肩透かしをくらったようにわざとらしくよろめいた。

龍神の石像とは龍神を崇めることを人間たちはいずれ龍神様を崇めなく作ったものだ。ただの石像では人間たちはいずれ龍神様を崇めなくなってしまうと考えたのか、はたまたせつかく作るのなら河童の技術を込めてみようと考えたのか、気象予報機能が付いている点がこの石像の特徴である。眼の色が白ければ晴れ、青ければ雨、灰色なら曇り、そして赤ならば異変という具合に天気を伝えている（最後のは天気ではないが）。的中率は七割程度であり、人里に住む人々もなかなか重宝しているようである。

「まあ、龍神様も神様だからね。ちょっと休みたくなることもあるんだらうよ」

「そうだね……」

「おお、河童の嬢ちゃん。お疲れさん」

「あつ、親方！」

「あ、ども……」

パートナーは元気に、にとりはよそよそしく挨拶した。

「徹夜の仕事が終わったから今から飲みに行くんだが、一緒に来るかい？」

「こんな時間から酒だなんて、やるね親方！ あたしは行くけどKはどうする？」

「わ、私はいいよ……今日はいろいろ回るところあるし」

にとりはもじもじしながら言った。

「そうか……わかったよ。じゃあねK。そうだ親方、酒代は当然親方の奢り……」

にとりはがっくりと肩を落とした。

「ああは言ったものの、これからどうしようかな……」

にとりは大通りを歩きながら呟いた。まだ昼食には早い時間帯である。酒場からは既に喧騒が聞こえてきているが、昼前から酒を飲もうと思うほどにとりは酒豪ではなかった。はあ、にとりはため息をついた。風が吹き、にとりは寒さで体を震わせた。

にとりがしばらくあてもなく歩いていると、人だかりができているのが見えた。あの中に紛れていれば少しは暖かくなるだらう、とにとりは考えた。

にとりは人混みをかき分け、少し背伸びをして人だかりの中心を

覗き込む。そこには人形劇を演じるアリス・マーガトロイドがいた。手には手袋をはめ、首には上海人形と揃いの赤いマフラーを巻いていた。その暖かそうな服装に、にとりは寒さが一層身に染みる。机の上にはヨーロッパの街の広場の絵を背景に太った男と頭に林檎を乗せた少年、そして弓矢を持ち、顎ひげを生やした男を模した人形が立っていた。

「そしてウイルヘルムは矢をつがえ……」

アリスの言葉と同時に弓矢を持った人形がまるで生きているかのように弓を引き、矢を放った。観客から悲鳴が上がり、矢が林檎を射抜いた瞬間、それは歓声に変わった。

「見事に林檎を射抜いたのです！」

「おお……」

にとりも思わず感嘆の声を漏らす。

「『父さん！』と叫んで少年はウイルヘルムに駆け寄り、『息子よ！』とウイルヘルムは少年を抱き止めます……」

アリスは登場人物ごとに声色を変えて語り続ける。

「この後、彼は故郷を救う英雄となるのですが、それはまた別のお話……」

アリスが語り終え、上海人形と一緒に一礼。同時に割れんばかりの拍手が響き渡る。にとりもその大音響の音源の一員となっていた。肌寒さも、霜焼けた手の痒さも忘れて。

「アリス！」

観客が去った後、にとりは後片付けをしているアリスに声を掛けた。

「にとりじゃない。人見知りのあなたが人里に来るなんて珍しいわ

ね

「へへ、今日はちょっと仕事があつてね……」

「ふーん、そうなんだ。河童もお気楽そうに見えてなかなか大変なのね」

アリスは軽く相槌を打ちながら人形たちを鞆にしまい始める。

「まーねー。と、それはおいといて……すごかったよ、さっきの劇！」

にとりは興奮気味に言った。頭の中で人形が放った矢が綺麗に林檎を貫いたシーンがループ再生される。

「あら、観てくれたの？」

「うん。最後のシーンだけだけどね。人形があんなに細かい芸当ができるなんてびっくりしたよ！」

「ああ、あれね。ありがとう。そう言ってもらえるとウィルヘルムも喜ぶわ」

アリスはにとりに向けてにつこりと笑った。遅れてアリスの肩に乗った上海人形もぺこりとお辞儀をする。

「ねえねえアリス、あの矢って必ず林檎に当たるように何か細工してあるの？」

「いいえ、ちゃんとウィルヘルムが狙って当ててるのよ」

にとりの瞳が一層輝く。子供が祖父母から新しいおもちゃを貰った時と同じ、好奇心に満ちた瞳。

「すごいすごい！ 私もロボットでそんな感じのをつくらうかなー」

「さーて、出来たとしてもウィルヘルムに勝てるかしら………あら、もうこんな時間？ ごめんねにとり、十一時から図書館で魔理沙とパチュリーとお茶する予定が入ってるの」

アリスは手首に着けた腕時計をちらりと見ると、鞆の止め金を留め、持ち上げる。

「じゃあまたね。その“ろぼっと”っていつのができたら見せて頂戴」

「うん！ じゃあねー」

アリスは時間を気にして生活しているらしい。あれがいわゆる“とかいは”な生活なのだろうか、とにとりは手を振りながら考えた。「ちよつとかつこよかつたけど、あんまり忙しい生活はやだなあ……」

にとりはアリスの姿が見えなくなった後、小さく呟いた。空を見上げる。相変わらず灰色の雲が空を覆っている。今日は太陽は一日中休むつもりのようなのだ。しばらくにとりが空を見上げていると、空からなにか冷たいものがふわりと降りてきて、頬に触れた。雪だ。「うっ」

骨まで染み渡るくらい冷たい風が吹き、にとりは思わず肩をすぼめる。何か温かいものを食べないと凍えてしまいそうだ。幸いにもここは人里、食べ物屋を見つければとても簡単なことだ。ちよつと道を歩けば必ず食事がありつける。このお手軽さを気に入って妖怪たちは毎日のように人里を訪れるのだろう。人里が妖怪でこつた返しているのもいささかおかしな話だが……

「おっ、あつたあつた。ありましたよ」

そんなことを考えているうちににとりは店頭にもくもくと湯気をたてる蒸籠の置かれた饅頭屋を見つけた。

「あ、すいません。あんまんひとつください……」

蚊の鳴くような小さな声でにとりは饅頭屋のおばさんに声を掛ける。どうしても初対面の人間と話すのは苦手だ。いつも伏し目がちになってしまっし、聞き返されたりなんてされたら目も当てられない。

「ハイハイ、餡まんね。そっだ、河童のお嬢ちゃん」

「ひゅっ！ な、なんですか？」

思わずなんともいえない悲鳴をあげてしまい、にとりは恥ずかしくて帽子を深く被り直す。おばさんは一瞬驚いたような顔をしてから、クスツと笑った。

「今日は寒いでしょ？ もう一個おまけしてあげる」

「あ、ありがとうございます……それじゃあ」

相変わらずの小さい声でにとりはお礼を言っ
て紙袋を受け取って
代金を手渡すと、逃げるように店を後にした。

「はあ……」

にとりは餡まんの入った紙袋を抱えてまたとぼとぼ通りを歩
いていた。手は紙袋越しに伝わる熱で暖かい。そのまましばらく歩
いていると、紙袋の底が湯気を吸って染みになってふやけてきた。

にとりは慌てて餡まんを一個紙袋から取り出して一口頬張った。
思っていたのよりもさっぱりとした上品な甘さが口いっぱいに広
がる。

「……おいしい」

二口三口とそのまま口へ運んでいると、簡単に腹の中へ収まっ
てしまった。まだ物足りないと感じたにとりは敷き紙を紙袋の中へ放
り込むと二個目に手をつけ、気がつくまで餡まん二個をぺろりと平ら
げていた。

にとりが紙袋をくしゃくしゃに丸めて小さくしてから辺りを見回
すと、いつの間にかめっきり人通りが少なくなっているのに気がつ
いた。ようやく待ちに待ったお昼時になったらしい。

「おっ、なんだこれ？」

洋風な喫茶店の前に立てられた「新メニュー：おしるこスパゲテ
イ」という看板が目がいった。

お汁粉はもちろん知っている。スパゲティも一度早苗がテレビを
修理してくれたお礼にと食べさせてくれたことがあるので一応知っ
ている。では「おしるこスパゲティ」とはどんな味なのだろうか？

にとりは腕を組んで首を傾げる。皆目見当がつかない。

ええい、実物を見て、食べて確かめてやる！ とにとりは喫茶店

に足を踏み入れた。

「いらつしゃいませー！」

店内はにとりが思っていた以上に賑やだった。カウンターやテーブルは丹念に磨きあげられており、木独特の光沢が引き出されている。

ほぼ満席のテーブル席とは異なり、まばらに席が埋まったカウンターに一人にとりがよく見慣れた人物が見えた。にとりはその人物の隣に腰掛けた。

「よっ！ 盟友！」

「やあ、にとり。人里に来るなんて珍しいね」

「はは、その他の友達にも言われたよ」

にとりは盟友と軽く拳を合わせる。

「ご注文はお決まりですか？」

「えっと、あの……お茶と看板に書いてあったやつを……」しどるもどろになりながらにとりはウェイトレスに注文する。盟友は気づかれないように顔をそむけて笑った。

「お茶は紅茶と緑茶、ほうじ茶がありますが……」

「あ……紅茶で」

「かしこまりました。ごゆっくりどうぞ」

ウェイトレスが一礼して戻っていく。にとりは一仕事したかのようにならう、と深くため息をついた。

「いやあ、注文するのって疲れるねえ」

「そんなのとりにとりだけだよ、多分。それよりさ……本当に食べるの？ えーと、おしるこスパゲティ」

「当然！ 気になったらそのままにしては置けない性分だからね！

盟友もよーくわかってるでしょ？」

「まあね……でもだからといってあんまり不用意に危険に突っ込むのはどうかと思うよ」

そう言っつてコーヒーを啜る盟友に向かってにとりは呆れたように深いため息をつく。

「まったく、盟友は心配性だね。もしおいしくても絶対分けてあげないからね！ 隣から漂う甘い匂いに腹の虫を鳴かすがいいさ！」

にとりはウェイトレスが置いていったコップに入った水を一気に飲み干してそっぽを向いて言った。残った氷がコップの底に落ちて音を立てる。

「どうぞどうぞ。どう考えても危険な二オイしかしてこないと思うけどね」

「く……なかなか思い切った決断だね。正解には程遠いがね」

にとりは悔しそうな顔をする。それは嫌だ、という答えを期待していたのだが、真逆の答えが返ってきた。

「はいはい。……とここでにとりは人里に何か用事でもあったの？」

「うん。龍神様の石像の点検があつてさ」

「ああ、あの天気を教えてくれるやつだね」

「そうそう」

「かなり重宝してるよ。それで、あれはどうやって天気を当ててるの？」

盟友は空になったカップを置く。

「あれはね、これまでの気象記録の入ったコンピュータがその日の気温、湿度、風の強さ、雲の動きを計算して記録と照らし合わせて一番近い天気を出してるんだ」

「コンピュータね……」

盟友はカウンターに肘をつく。式神のようなものだということくらいしか知らない。

「でも何せ大昔に作られたものだからね、本物の神様みたいに気まぐれでさ。当たらないこともしばしば……ってそれは盟友の方がよ

「く知ってるね」

「うん」

「しかももう予備が無いから古いコンピュータをずっと使ってるんだ」

「新しく作らないの？」

疑問に思った盟友が訊いた。河童の技術力ならそれくらい作るくらい彼にはたやすく感じられるのだが。

「作り方がわからないんだ。基板はもう経年劣化でぼろぼろでね、どうしてこんなになっても動いてるのかこっちが聞きたいくらいだよ」

「もしかしたら本物の龍神様がちよくちよく来て動かしてるのかもね」

盟友は冗談半分に行った。龍神が最後に姿を見せたのは博麗大結界を張った日だったと彼は寺子屋で習っていた。

「うーん、それでも考えないと合点がいかないだよねえ……ああ気になる」

にとりは頭を抱える。こればかりはどうしてもわからないのだ。

「そういえば早苗が言ってたんだけど外の世界だと、はたてさんが持つてるみたいなの携帯電話でも天気がわかるんだって！」

「外の世界……」

盟友は微妙な顔をした。

「そう、外の世界。すごいよね、どんなところなのかな。盟友も気にならない？」

にとりは楽しそうに言う。盟友は黙っていた。

「……盟友？」

「あ、ああごめん。ちょっとぼーっとしてた」

「もう！ しっかりしてよ」

にとりが肘で盟友を小突く。盟友は申し訳なさそうに笑った。ちようどその時お盆を持ったウェイトレスがにとりの前に大きな鍋を置く。

「お待たせしました。紅茶と……えっと、おしるこスパゲティです。ごゆっくりどうぞ……」

ウェイトレスは困った表情をしながらそそくさと持ち場に戻っていく。にとりは目の前にでん、と置かれた鍋を呆然と見つめている。真つ黒なスープの上には途中でにとりで食べてきた餡まんよりも大きな餡の塊と切り餅が浮かんでいた。鍋焼きうどんという単語が頭に浮かんだ。

「……麺、のびるよ」

盟友が苦笑いしながらにとりの肩を叩く。

「わ、わかつてるよ！ いただきまーす……」

にとりは恐る恐るフォークを真つ黒なスープに突っ込む。盟友はやれやれと感じながらコップに水を注ぐ。

「……盟友」

「どうしたの？」

「私はスパゲティを頼んだんだよね」

「そのはずだけど？」

「……見てよこれ」

にとりのフォークには程よく角がたった白い麺が絡まっていた。

「……うどん」

「だよねえ。しかも……」

にとりはフォークを口に運ぶ。

「麺まで恐ろしく甘いよ……ねえ盟友」

「なんだい？」

「ちよつと、食べてみたくない？」

「食べてみたくない」

やっぱりか、にとりは肩を落とすと、再び甘味の塊と向かい合う。にとりはその日から一週間、餡子を見ただけでも逃げ出すようになった。

神様と遊ぶ

幻想郷の四季は妖精達の心のように気まぐれで、冬は特にそれが顕著だ。乾いた風が冬の到来を感じさせたかと思えば、次の日には真冬のように幻想郷が雪で覆われることもしばしばである。

「うひゃーっ！ ゆうべはまた随分と降ったなあ」

玄関のドアを開けて目の前に広がる銀世界に、にとりは思わず驚きの声を上げた。

はらはらと舞う雪が地面を白で塗りつぶしている。秋もたけなわといった様子で色づいていた周りの木々も、今ではすっかり葉を落としてしまっており、黒い枝と幹を残すのみである。

辺りははすでに昼時だった。空にはどんよりとした雲が立ち込めている。風が吹いていないぶん思ったよりも外は寒く感じられない。かといって今更外へ出かけよう、という気分にはなれなかった。にとりはここで初めてあまりの寒さに布団から抜け出すことができずに二度寝、三度寝してしまったことを少し後悔した。

びゅう、と一つ雪混じりの強い風が吹いた。

「あいや〜」

いかなあこりゃ、と呟きながらにとりは寒そうに肩を抱く。今日は自然に逆らわずに大人しく引きこもっていた方が賢明だとにとり思った。それから煙草を吹かすように口からふう、と深く白い息を吐き出し、そそくさと家に戻った。

「おかえり、にとり」

家に入ると雛が笑顔でにとりを出迎えてくれた。

「えーつと……なんで雛がいるの？」

「あら？ 朝に私 came きたときに布団にくるまったまま『いらっしやい』って言うてくれたの、覚えてない？」

「……覚えてない」

にとりはしばらく天井を見上げてから、首を横に振る。

「ああ、つまり寝ぼけてたのね。なら仕方ないわね」

「勝手に納得しないでよ……」

にとりは頭をおさえながら疲れた顔をして言った。神出鬼没とはこの事だろうか、にとりは思った。

「まあ、それはおいといて」

「おいとくな」

「あたっ」

にとりは自分をおいてきぼりにして話を進めようとした雛の頭を手刀でぺしっ、と叩く。

「今日はにとり用事ある？」

にとりに叩かれた部分をわざとらしく撫でながら訊いた。

「……今日は雪だしずっと機械弄るつもりだよ」

「えー、遊びましょうよ」

雛は口を尖らせて言った。にとりにお節介を焼くわりにわがままだったりと、雛は大人びているのか子供っぽいのかわかりづらい様子である。

「うーん……じゃあ一段落ついたら遊ぼうか」

「にとりが話がわかる子で助かるわ」

「は、はは……」

にとりは苦笑いしながら雑多に物が置かれた棚から作りかけのラジオを手に取り、作業台に向かった。ちらりと横を見ると、雛が笑

顔で正座をしてにとりを見ていた。少し気になるな、と感じたがにとりは無視して作業台に視線を戻してドライバーでネジを回す。裏面の四隅に付けられたネジを外すと、半分弱の配線がはんだ付けされた基板が露になる。今日は残りの半分以上を仕上げるつもりだ。

ちらりと横を見る。雛がにこにこ笑っていた。

「……………」

気になるな、と感じたがにとりは無視して再び作業台に視線を戻して加熱されたはんだごてを手に取る。電源には電池を使っている。かなり電池の消耗は早いバッテリーからのコードが必要ないのでコードにつまづいて転ぶことが多いにとりはコードレスであることが重要だと考えて使っているのにとりはさして気にはしなかった。にとりがはんだ付けを始めると、金属と松脂の焦げるような匂いが漂いだした。この“ああ、作業してるな”と実感させる匂いがにとりは好きだ。

ちらりと横を見る。やはり雛はにこにこ笑顔でにとりの作業が終わる待っていた。

「………… ああもう！ やめたやめた！」

気が散って気が散って作業どころではなくなったにとりのはんだごての電源を切った。

「あら、もう終わり？」

「そっだよ！」

雛が首を傾げて訊くと、にとりはぶっきらぼうに言った。

「意外と飽きっぽいのね、にとりって」

ばたばたと後片付けをするにとりを見て、雛は呟いた。

「将棋のルールって雛は知ってたっけ？」

作業台の上に駒を並べながらにとりが言った。椀とは“強敵”と書いて“とも”と呼べるほどしょっちゅう対局しているが、思えばにとりは彼女よりも付き合いの長い雛とは将棋を指したことはなかった。

「あるわよ」

（よかった、説明が省ける）

にとりはほつと胸を撫で下ろした。にとりも他人の事は言えないのだが雛も質問を始めると止まらないタイプだからだ。

「じゃ、始めましょ。どっちが先攻め？」

「雛が先手でいいよ。お手並み拝見、つてね」

にとりは腕を組んで余裕たっぷりに言った。雛がどの程度の実力かはわからないが、彼女のおっとりとした性格からして、大したものではないだろうと踏んだのだ。それに、にとりには相手がどんな攻め方をしてくいても軽くないなせる自信があった。

「そう？　じゃあまずほ……」

雛はにとりから見て右端の歩兵に触れた。

（そこを空けて角を動かすのかな？　まあよくありがちな手だけど

……）

「……つてまてまて」

にとりは雛が歩兵をそのまま香車のように何マスも進めようとしたのであわてて手で止めた。

「ん？　どうしたのにとり」

「どうしたもこうしたもないって。雛……ほんとに将棋やったことある？」

にとりが雛の顔を覗き込みながら言う。雛は不思議そうに首を傾げると、ええ、と頷いて

「私はそんなくだらないことで嘘ついたりしないわよ？」

と答えた。

「あっ、言い方が悪かったよ。やったことある将棋は？」

「はさみ将棋」

「……やっぱりトランプしよっか」

「あら、いいわよ。将棋よりもトランプの方が得意だしね！」

雛はそう言って胸を張り、にとりははあ、と深いため息をついた。

「これはね……ここ！」

楽しそうに神経衰弱を当てていく雛に、にとりは驚きを隠せず、腕を組んで低く唸った。部屋には点けたばかりの電気ストーブも、にとりにつられたように低く唸っている。

ミスフォーチュンやらバッドフォーチュンやら、自分のスペルカードに厄い、いかにも不運そうな名前を付けるわりに、雛自身は竹林を歩けば幸運の素兎に出会い、山を歩けば八葉のクローバーを見つけられるような幸運の持ち主である。

「これはここで……」

「おお……」

そうこう言っている間に雛は既におよそ半分は取っていた。

「ふふっ」

「な、なにさ。いきなり笑ったりして」

「ああ、ごめんね。ちよっと昔の事思い出しちゃって」

そう言っただけはもう一度にとりに笑いかけた。すこし悪戯っぽい笑顔だった。

「……何を？」

にとりは口を尖らせ、つつけんどんに言う。雛があんな笑顔を見せるのは大抵にとりからかうときだからだ。どうせ今度もその類だろう、とにとりは思ったのだ。

「昔はよく二人でこうやって遊んだなあ、って。それだけよ」

「そう……」

にとりはからかわれなかった思わずほっとした。

「そういえば、昔はお互い『にとりちゃん』、『ひなちゃん』って呼び合ってたわね」

「そうだったけ？」

「そうよ〜」

「うわあ」

今じゃ口が裂けても言えないや、とにとりははにかみながら言った。

「あら、私は平気よ？』にとりちゃん』」

雛がトランプをめくりながらからかうように言った言葉が、にとりには懐かしくもどこかくすぐったく感じられて、思わず顔をそむけた。

「それから、これはここ！ はい、パーフェクト！」

「ほんとに全部取っちゃったよこの厄神様……」

「えっへん！」

雛は自慢げに胸を張る。結局にとりには一回も出番がまわって来なかった。

「……次は何しよつか？」

「屋根に登って月見しましょ」

そう言っただけは窓の外を指さす。外は真っ暗だった。

「えー……雪降ってるんじゃない？」

「大丈夫、私が保証するわ。さあ、行きましょ！」

「ちよ、ちよっと！」

雛はにとりの手を引いて窓を開け、外に身を乗り出した。さっと冷たい風が部屋に吹き込む。雪は混じっていないなかった。

「ほらね、雪も止んでるし、綺麗な空でしょ？」

「わあ……」

そのままにとりは窓の棧を軽く蹴ってふわりと飛び上がり、屋根を見下ろす。屋根は白い雪で覆われていた。にとりは積もった雪を軽く払い、屋根に仰向けに寝転がった。視界いっぱいには夜空が広が

る。まだ少し時間が早く、夏ならまだ明るい時間帯であるので、星の数はまばらだった。だがそれを補って余りあるほど輝く月に、にとりは見とれていた。

「こつやって一緒に夜の空を見るのも久しぶりね、にとりちゃん」
徳利と猪口を持った雛がにとりに酌をしながら言う。

「そだね。夜は晴れてよかったね。あー……その、ひなちゃん」
しどろもどろになりながらそう答えると、にとりは恥ずかしそうに顔を赤くしながら、「と猪口を傾ける。少しむせた。

「ほんとよね。満月、とまではいかなくても今夜は月がきれ」
雛は突然顔を赤らめて口をつぐむと、猪口を少し傾けた。

「うん？　今夜は月が綺麗だよ」

「あら、プロポーズ？」

「そ、そんなんじゃないって！」

雛が悪戯っぽく聞くと、にとりはさらに顔を赤くし、「ごまかすようにあわてて自分で酌をして再びぐい、と酒を飲み干す。またむせた。

ふふつ、と雛がくすくすと笑いながら、ささ、もう一杯にとりの猪口に酒を注ぐ。にとりは照れくさそうに笑って酌を受ける。夜空に浮かぶ月は白く淡く光っていて綺麗だった。

神様と遊ぶ（後書き）

「月が綺麗ですね」は「I love you」の意識らしいですね。

私としては月が綺麗ですね、と言っ方が恥ずかしいと思うのですが……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5753t/>

河城にとりの科学的？ 生活

2011年12月25日01時54分発行